

平成22年度  
卒業論文

対人場面における失敗の原因帰属が  
自己効力感に与える影響

三重大学教育学部  
人間発達科学課程  
人間発達科学コース 59期  
207721 松谷健二

平成23年1月20日提出

## 【目次】

【要旨】	5
【問題】	7
1. はじめに	7
2. 心理学における期待概念研究	7
3. 対人的な自己効力感が行動に及ぼす影響	9
4. 自己効力感の情報源	11
5. 結果（遂行行動の達成）の認知に影響を与える要因	12
6. 原因帰属と自己効力感	14
【目的】	16
—予備調査—	18
【方法】	18
【結果と考察】	18
—本実験—	20
【実験方法】	20
【結果】	30
1. 尺度構成	30
1-1) 対人的自己効力感	
1-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感	
1-3) 初対面の人との会話に対する意欲	
1-4) 普段人と話す頻度	
2. 各帰属群における対人的自己効力感得点・初対面の人との会話に対する 自己効力感得点の変化の比較	31
2-1) 対人的自己効力感の変化の比較	
2-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の比較	
3. 各帰属群における対人的自己効力感得点・初対面の人との会話に対する 自己効力感得点と普段人と話す頻度の関係	34
3-1) 対人的自己効力感の変化の比較	

3-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の比較	
4. 各帰属群における初対面の人との会話に対する意欲得点の比較	37
5. 方略帰属群・外的要因帰属群における次の試行の方略記述の文字数・記述 内容の比較	38
5-1) 次の試行の方略記述の文字数の比較	
5-2) 次の試行の方略記述の内容の比較	
<b>【考察】</b>	42
1. 帰属群の違いによる自己効力感の変化の違い	42
1-1) 対人的自己効力感の変化の違い	
1-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の違い	
2. 帰属群・普段人と話す頻度の違いによる自己効力感の変化の違い	44
2-1) 対人的自己効力感の変化の違い	
2-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感の違い	
3. 帰属群の違いによる意欲の変化の違い	45
4. 方略帰属群・外的要因帰属群における次の試行の方略記述の文字数・記述 内容の比較	46
4-1) 次の試行の方略記述の文字数	
4-2) 次の試行の方略記述の内容の比較	
<b>【総合考察】</b>	50
<b>【今後の課題】</b>	54
<b>【引用文献】</b>	56
<b>【謝辞】</b>	59
<b>【資料】</b>	61
1. 予備調査質問紙	61
2. 被験者募集用紙	62
3. 事前質問紙	63
4. 盛り上げ評定用紙	68
5. 課題失敗後質問紙	70

6. 原因帰属記述用紙 (方略帰属群) . . . . .	73
7. 原因帰属記述用紙 (外的要因帰属群) . . . . .	74
8. 次の方略記述用紙 (方略帰属群・外的要因帰属群) . . . . .	75
9. 次の話題記述用紙 (統制群) . . . . .	77
5. 帰属過程後質問紙 . . . . .	79

## 【要旨】

本研究では対人場面における失敗の原因帰属のさせ方の違いによって、対人的自己効力感、初対面の人との会話に対する自己効力感の変化にどのような影響を及ぼすのかを検討した。具体的には、方略帰属に着目し、方略帰属群を設け、方略以外の要因に帰属させる群の帰属因については、予備調査を行い、外的要因帰属群を設けることに決定した。被験者を方略帰属群・外的要因帰属群・統制群に分け、その帰属群の違いによって、自己効力感得点に違いが出るかを、初対面の人との会話場面を想定した実験により、検討した。また、実験状況が初対面の人との会話場面であることから、自己効力感や原因帰属と関連のある要因として、意欲と普段人と話す頻度を測定し、自己効力感、原因帰属との関連を検討した。さらに、Clifford(1986)において、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆に基づいて、方略帰属群と外的要因帰属群が原因帰属後に有している方略の有効性についても比較検討した。その方法としては、原因帰属後に次に初対面の人と話す場面において用いる方略を記述させ、その記述内容を分析し、2群を比較検討した。

帰属群の違いによる自己効力感の変化の違いを検討した結果、対人的自己効力感についても、初対面の人との会話に対する自己効力感についても、帰属群の違いによって自己効力感の変化に有意な差はみられなかった。このことから、本研究における原因帰属過程の手続きでは、自己効力感にそれほど大きな影響を及ぼさないことが示され、原因帰属過程の手続きの再検討の必要性が示唆された。

また、普段人と話す頻度の違いによる自己効力感の変化の違いを検討した結果、対人的自己効力感についても、初対面の人との会話に対する自己効力感についても、普段人と話す頻度の違いによって自己効力感の変化に有意差はみられなかった。このことから、普段人と話す頻度は自己効力感の変化にそれほど大きな影響を及ぼさないことが示唆された。さらに、帰属群の違いによる初対面の人との会話に対する意欲の変化の違いを検討した結果、帰属群の違いによって、初対面の人との会話に対する意欲の変化に有意な差はみられなかった。また、時期によっても初対面の人との会話に対する意欲の得点に有意な差がみられなかったことから、今回の実験における失敗体験、原因帰属過程は初対面の人との会話に対する意欲に対しては、それほど大きな影響力を持っていなかったことが示された。

そして、方略帰属群・外的要因帰属群における次の試行の方略記述の文字数・記述内容

の違いについて検討した結果、記述内に含まれる方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも記述に含まれる方略の数が有意に多かった。また、方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも、記述に含まれる方略の実行可能性が有意に高かった。これらの結果から、本研究の実験中の原因帰属過程において、Clifford(1986)の示唆する失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされたこと、実行可能性についても高まるよう方略の探求がなされている可能性が示唆された。以上のような示唆から、方略がより明確に知覚されること、効果的で実行可能性の高い方略を使用し、次の初対面の会話場面で成功体験をすることによっても、自己効力感が高められるということが考えられる。

## 【問題】

### 1. はじめに

人が日々、生活する上で他者との関わりは避けることのできないものである。しかし、ときにその他者との関わりに悩みを抱えてしまうこともあるだろう。特に、青年期においては対人関係に関する悩みを持つことは少なくない。Seiffge-Krenke(1995)は、青年が日常的に経験するストレスイベントの多くに対人関係上のトラブルが伴っており、友人との意見の不一致やコミュニケーションの問題から孤独感や屈辱感が生じると報告している。そのため、青年期においては、他者の目を過度に気にしたり、人前で過度に緊張するなどの対人恐怖心性が広く認められるといわれている(永井, 1994)。さらに青年期の中でも、大学生においては、集団にとけ込めるかどうかが生徒生活において、死活問題となる傾向にあり、集団交際恐怖的な心性が高まりやすいこと(堀井, 2002)などが指摘されている。

このような現状をみると、現代青年は他者と積極的に関わることができず、対人的な自信を失ってしまっていると考えられる。しかし、対人的な自信がなくては、さらに他者と関わる機会を失ってしまい、よりいっそう対人恐怖心性などを高めてしまうことが考えられる。よって、青年期における対人的な場面における問題を解決するためには対人的な自信を高めることが重要であると考えられる。「自信」は心理学では期待概念として扱われ、多くの研究がなされてきた。

### 2. 心理学における期待概念研究

心理学における期待概念研究の代表的なものとして、まず Atkinson(1964)は期待価値理論が挙げられる。Atkinson はその期待価値理論の中で期待の重要性を述べている。期待価値理論では、課題達成への主観的な成功確率である「期待」と、成功時に感じる誇りの感情、失敗時に感じる恥の感情である「価値」による動機づけについて述べられている。この理論では期待と価値は補償的な関係とされており、期待が高まるほど価値は低まり、期待が低まるほど価値が高まると考えられている(Atkinson & Feather, 1966)。さらに、Atkinson は達成動機の強さが一定であれば、主観的成功確率が半々の課題で動機づけが最も高まるという予測を導き、実験的に検討している。

また、Rotter の Locus of Control (1966) も期待概念研究の代表的なものの一つである。Rotter (1966) は、「人間の行動は個人が目標に対して抱く価値と期待の関数である」と考え、「同じ行動に対して与えられた同一の強化（行動の結果）であっても、その結果には必

ず個人差が伴う」ことを指摘し、Locus of Control の概念を提唱した。Rotter (1966) は、ある状況において得られた結果は、その個人が、その結果を何と随伴したものとして認知するかによって、その後の行動に対する期待が影響を受けるとしている。さらに、結果が自分自身の「努力」や「能力」、「特性」によるもので統制可能感ものに随伴していると認知するとき、内的統制とし、逆に、結果が「運」や「他者」など自分自身以外の、外的状況に随伴していると人が知覚する場合、外的統制としている。その後の研究から、内的統制は学業達成との正の関連が示唆されている (Findley & Cooper ,1983)。

そして、期待概念研究の中でも最も幅広く研究されているのが、Bandura の提唱した社会的学習理論(Bandura,1977)である。Bandura はその社会的学習理論の中で、行動変容の先行要因としての期待には、2つのタイプがあるとしている。第1のタイプの期待は、ある行動がどのような結果を生み出すかという期待であり、結果予期とよばれている。この結果予期は Atkinson の期待価値理論における「期待」に対応するものである。第2のタイプの期待は、ある結果を生み出すために必要な行動をどの程度うまくできるかという期待であり、効力予期とよばれている。Bandura は Figure 1 のように、従来の期待概念である結果予期を「自分 (人) と行動についての期待」として、効力予期を「ある事態への対処行動をうまく遂行することが自分に可能かどうかに関する期待」と区別して扱っている。

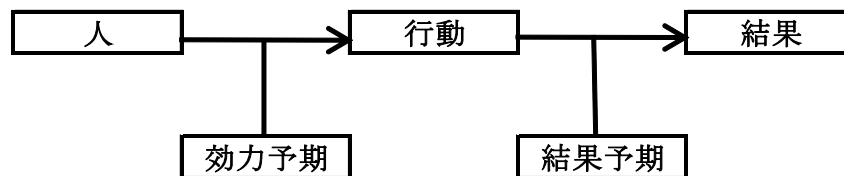


Figure 1 効力予期と結果予期の関係 (Bandura, 1977)

Bandura はこの2つの期待のうち、効力予期が動機づけを大きく規定すると考えており、「知覚された効力期待は、活動や場面の選択に影響するのみならず、努力にも影響を与える。知覚された効力予期は、どのくらい努力するのか、困難に直面した際にどのくらい耐えるかを規定している。すなわち知覚された効力予期が強ければ強いほど、より努力する」と論じている(Bandura, 1977)。このように、個人によって知覚された効力予期は自己効力感とされている。言い換えるならば、ある行動を起こす前にその個人が感じる遂行可能感、自分自身がやりたいと思っていることの実現可能性に関する知識、あるいは自分にはこの



ようなことがここまでできるのだという感覚が自己効力感である (Bandura, 1985)。上述のように、人がこれから行おうとしている行動に対してどの程度自己効力感をもっているかは、その人の行動の活性化や行動の修正と大きく関連する。

さて、自己効力感はある特定の場面で遂行される特定の行動に影響を及ぼす。そのため、様々な場面で自己効力感が行動に及ぼす影響についての研究がなされてきた。たとえば、学習場面においては、塩見・駒井(1994)は自己効力感が高いものほど、理科の成績が高く、理科不安が低いことを示している。また、桜井(1987)は自己効力感が学業成績と正の関係にあることがほぼ確認されたと述べており、そこから、自己効力感を高めることによって、学業成績を上げることができるという可能性を指摘している。さらに学業成績に関するもの以外にも、自己効力感の高い生徒はより粘り強く努力すること、難しい問題に挑戦すること、正確に問題を解くこと、テスト不安が低いことなどが多くの研究によって明らかにされている(坂野, 1988 など)

また、進路選択場面においては Taylor & Betz(1983)が進路決定自己効力感尺度である CDMSE を作成して、それと進路不決断との負の関係を見いだしている。また、富安(1997)は進路決定行動の積極的な展開の予測因としての進路選択自己効力の重要性を示唆している。さらに、小久保(1998, 2000)は一般的自己効力感の高い学生は職業レディネス・職業選択へのモチベーションが高いことを報告している。そのほかにも、大学生のインターンシップについて自己効力感の視点から考察した研究(楠奥, 2006)などさまざまな研究が行われている。

さらに、スポーツの場面においても、岡(2003)が運動セルフ・エフィカシーを測定する尺度を作成し、運動の継続にセルフ・エフィカシー、すなわち自己効力感が重要な役割を果たすことを示唆している。また、前田・園田・杉山(2003)は自己効力感とその後のパフォーマンスの促進に重要な要因となっていることを示している。

そして、対人場面においても、自己効力感が行動に及ぼす影響について検討されている。

### 3. 対人場面における自己効力感

対人場面においては、自分がどのくらい相手とうまく関係を築いていけるかという自己効力感つまり対人的自己効力感が、対人関係の開始や維持に及ぼす影響について検討されている。松尾・新井(1998)では、児童の対人不安傾向と対人的自己効力感の間には、有意な負の相関がみられたと述べられている。また、松島・塩見(2002)では、対人的自己効力感が

高いものほど、対人ストレスが低く、対人ストレス対処方略を多く行う傾向にあること、対人的自己効力感が高いほど問題に積極的に対処する傾向が強く、適切に問題解決をする傾向があることが示されている。さらに、松島・塩見(2003)では、対人的自己効力感が低いにもかかわらず、ストレス対処方略を多く行っているものの対人ストレス得点が高いことが見出され、対人ストレスを軽減するには対人的自己効力感を高める必要性があることが示された。

また、上述したような自己効力感と対人的な問題の関係を検討した研究だけでなく、自己効力感を高めるような介入が対人場面での行動に影響を与えることも指摘されている。前田・坂野・東條(1987)は、学校内で強い視線恐怖反応を示す14歳男子中学生の症状改善と恐怖を感じることなく適応行動をとれるかどうかという自己効力感の間には密接な関係があることを見出している。さらに前田ら(1987)はその児童が適応行動を行うことができるという自己効力感が行動変容の先行要因として機能すると指摘している。嶋田(1996)は、対人スキルに乏しく、抑うつ感の強い中学生に対して、友人とのつきあいに対する自己効力感を向上させるような介入を行い、自己効力感を向上させたところ、学校に対する統制感が高まり、回避的な態度が減少し、抑うつ感や身体的愁訴が改善されたことを報告している。さらに、前田(1991)は、朝礼や集会に過剰な恐怖反応を示していた児童との教育相談過程において、具体的な行動遂行が伴わない状況下において自己効力感を高めることによっても、それに呼応するように行動遂行場面における行動変容が起こることを確認している。以上のように、対人的な自己効力感是对人関係場面の問題解決と正の関係があることが確認されており、さらに対人的な自己効力感を介入によって高めることができることが示されている。よって、介入によって対人的な自己効力感を高めることは、対人的な場面での行動にポジティブな影響を与えられと考えられる。そこで、研究では対人的な自己効力感を高めるような要因について検討する。さらに、対人的な場面における介入研究において、行動にポジティブな影響が見られていることをもとに、本研究においても、実験を用いた自己効力感を高めるような介入による効果の検討を行う。実験場面については、後藤・大坊(2003)が大学生は概して、初対面の人との会話に苦手意識を感じていることを示唆していることから、大学生にとって初対面の人との会話場面は自己効力感が影響を受けやすい場面であると考えられる。よって、本研究では初対面の人との会話場面を想定した実験における介入が自己効力感に及ぼす影響について検討する。

#### 4. 自己効力感の情報源

Bandura(1977)は、自己効力感は自然発生的に生じてくるものではないとしており、自己効力感が増えるには、「遂行行動の達成」、「代理的体験」、「言語的説得」、「情動的喚起」の主に4つの情報源があると述べている。第一の情報源である「遂行行動の達成」は成功経験を体験し、達成感をもつことである。人は一般的にある行動をうまく行って成功感を感じたあとでは、同じ行動に対する遂行可能感が上昇するが、逆に、失敗感を感じたあとでは、同じ行動に対する遂行可能感が低減されてしまう。

第二の情報源である「代理的体験」は自分以外の遂行モデルを観察することによって、そこから得た情報によって自己効力感が影響を受けるということである。他人の成功している様子を見て、「自分にもできそう」と感じたり、失敗している様子を見て、「自分もできないかもしれない」と感じたりすることによって、自己効力感が影響を受けるのである。

第三の情報源である「言語的説得」は、自分に能力があることを他者から説明されたり、自分自身に言い聞かせたりすることである。しかし、この情報源は自己効力感への影響力がそれほど大きくないとされており、他者からの教示や自己暗示などを遂行行動の達成や代理的体験に補助的に付加することで、自己効力感に影響を及ぼす。

第4の情報源である「情動的喚起」は自己の生理状態を知覚することである。つまり、ある行動を起こす前に自分が落ち着いていることを知覚することで、「これならできそう」と感じたり、逆に心拍数があがったり、手が汗ばんだりしているのを知覚することで、「もしかしたらできないかもしれない」と感じたりするように、情動的な喚起状態を知覚することで、自己効力感が影響を受けるということである。

四つの情報源の中でも、成功経験を体験し、達成感をもつことである「遂行行動の達成」は最も強い情報源とされている。つまり、直接的な成功体験や失敗体験が自己効力感に最も大きな影響力を持っているのである。よって、成功体験をすると自己効力感は大きく上昇するが、失敗体験を経験してしまうと自己効力感は大きく低減されてしまうのである。そのため、より多く成功体験を積み重ねることが自己効力感を高めるためには重要だと考えられるが、人は成功体験だけを積み重ねることはできない。人が生きていく上では失敗体験を経験することは避けられないだろう。そして、失敗体験を経験すると自己効力感が大きく低減されてしまう。さらに、失敗体験を経験する度に自己効力感が下がってしまえば、行動の活性化が期待できず、次の行動にネガティブな影響を及ぼしてしまうことが考えられ、さらに失敗体験をくり返すこととなってしまう。そうならないためには、失敗体

験後の自己効力感をできるだけ高く認知させることが重要であると考えられる。では、失敗体験を経験しても次の行動に対する自己効力感を高く認知させ、行動の活性化を促すためには、どのような手続きをとればいいのだろうか。そこで、本研究では失敗体験後の次の行動への自己効力感を高く認知させる方法について検討する。さらに上述したように、本研究では初対面の人との会話場面を想定した実験における介入が自己効力感に及ぼす影響について検討するため、実験手続き中に失敗体験の過程を設け、介入が失敗後の自己効力感に及ぼす影響について検討する。

## 5. 結果（遂行行動の達成）の認知に影響を与える要因

結果の認知に影響を与えるものの研究で取り上げられるものとしては、参加モデリングやエクスポージャーなどがあるが、特に頻繁に取り上げられるものとして、原因帰属があげられる。原因帰属とは、行動の結果に対する原因の認知であり、その原因帰属のさせ方がその後の行動や動機づけに影響を及ぼすことが多くの研究で示唆されている（杉浦，1995；増田 1994 など）。原因帰属については様々な理論が提唱されてきたが、Weiner(1972)の達成場面における原因帰属理論は幅広く研究されている。Weiner(1972)は、成功や失敗の原因を何に求めるかのよって行動、感情、動機づけへの影響が異なると述べて、具体的な帰属因として、能力、努力、課題の困難度、運の 4 つが挙げている。そして、この 4 つの要因はその要因が時間的に安定して変わらないかどうかという「安定性」とその帰属因が行為者の内部にあるか外部にあるかという「原因の位置」の 2 つの次元を用いることにより分類されている（Table 1）。

	安定	不安定
内的	能力	努力
外的	課題の難易度	運

この 2 つの次元のうち、安定性の次元は期待の変化に影響するとされており、結果を安定的な要因に帰属するほど、次回も同じような結果になるだろうといった期待を生じさせ、結果を不安定な要因に帰属させるほど次回はどうなるか分からないといった期待を生じさせると考えられている。また、原因の位置の次元は成功の際の誇らしさ、失敗の際の恥ずかしさなどの感情に影響を与えるとされており、外的な要因に帰属されたときよりも内

的な要因に帰属されたときの方が過去の経験によって生じる感情を大きく認知すると考えられている。

のちに Weiner は3つ目の次元である「統制可能性」の次元を設定し (Weiner, 1979), 「原因の位置」・「安定性」・「統制可能性」の3次元, 「能力」・「気分」・「不断の努力」・「一時的な努力」・「課題の困難度」・「運」・「教師の偏見」・「他者の日常的でない援助」の8要因による原因帰属理論を提唱している (Table 2)。

Table 2 原因帰属の次元と要因 (Weiner, 1979)

	内的		外的	
	安定	不安定	安定	不安定
統制可能	努力	気分	課題の困難度	運
統制不可能	ふだんの努力	一時的な努力	教師の偏見	他者の日常的でない援助

この8要因のうち、内的で、不安定で、統制可能な要因である「努力」は、動機づけと関係の深い帰属因であると考えられている。

また、Abramson & Seligman (1978) の改訂学習性無力感理論では、人は、出来事の原因を「内在性次元」, 「安定性次元」, 「全般性次元」という3次元で帰属すると仮定している。内在性次元とは、統制不可能な状況の原因を自分自身に帰属する内的帰属と、自分以外の他者や環境に帰属する外的帰属に関する次元である。次に、「安定性次元」とは、統制不可能な状況の原因が将来も起こりうると帰属する安定的帰属と、その場限りで一時的なものであると帰属する不安定帰属に関する次元である。最後に、「全般性次元」とは、統制不可能な状況の原因がどのような状況にでも起こりうるとする全般性帰属と、その状況特有であると帰属する特殊性帰属に関する次元である。改訂学習性無力感理論では、統制不可能な状況の原因を内的、安定的、全般的に帰属しやすいものほど、学習性無力感や抑鬱に陥りやすいことを仮定している。さらに、Seligman(1991)は、Abramson & Seligman (1978) の改訂学習性無力感理論をもとに、楽観的説明スタイルという概念を提唱している。楽観的な説明スタイルにおいては、自分にとって正の出来事すなわち望ましい良い出来事が起きたとき、その出来事を内的で、永続的で、全体的な原因によるものとして説明し、反対に自分にとって負の出来事すなわち望ましくない出来事が起きたとき、その出来事を外的で、一時的で、特異的な原因によるものとして説明すると述べている。さらに

Seligman(1991)は、再帰属訓練を通して帰属様式を変容させることで、自己否定、自己卑下の状態にある子どもたちが自己効力感を自覚し、活動への動機づけが高まり、活動の成功可能性が向上したと述べている。これらのことから、原因帰属は結果の認知、つまり「遂行行動の達成」の認知に影響を及ぼすため、失敗体験についても、原因帰属の仕方によっては次の行動への自己効力感を高く認知させることができると考えられる。よって、本研究では失敗体験後の自己効力感を高める要因として、原因帰属を取り上げる。

## 5. 自己効力感と原因帰属

これらの原因帰属研究をもとに、自己効力感と原因帰属の関係については多くの研究が行われている。たとえば、Schunkは一連の研究のなかで、教育場面での帰属フィードバックの自己効力感への影響について検討しており、成功体験を能力や努力に帰属フィードバックすることで、自己効力感が高めることが可能であることを明らかにしている(Schunk,1995)。また、玄(1993)は実験者が児童に与える努力帰属的評価と、自己効力感・遂行水準との関係を検討している。玄(1993)は実験者が努力帰属的評価を与える上で介入方法として、成功事態に注目し、それによって頑張りを励ます場合と、失敗事態に注目し、それによってさらなる頑張りを求め励ます場合の2通りの条件を設定した。さらに先ほどの2群に遂行結果のみを与える統制群を加えた3群の比較によって、努力帰属的評価の効果を検討している。その結果、成功事態に注目した努力帰属的評価が自己効力感と学習スキルの上昇に有効であることが示唆されたが、失敗自体に注目した努力帰属的評価については自己効力感の有意な上昇はみられなかった。さらに、伊藤(1996)は、学業達成場面において、自己効力感、原因帰属、学習方略の関係を検討しており、失敗を努力帰属するからといって、一様に高い自己効力感を伴うとは限らないことを示唆している。さらに、伊藤(1996)は、失敗の努力帰属が自己効力感を高く認知させること、自己効力感に対して方略の使用がポジティブな影響を及ぼすことを示唆している。それらをふまえて伊藤(1996)は失敗時においては努力帰属し、方略の使用を高めるような実践的介入を行うことで、さらに自己効力感を高め、学習に対しポジティブな姿勢を形成していけると述べている。

また、伊藤(1996)は失敗を努力帰属し、方略の使用を高めることの重要性を述べているが、その方略自体を帰属因として扱っている研究もある。中西(2004)では、成功/失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響を検討しており、成功の方略帰属が自己効力感を高め

ることを示唆しており、有意ではないが失敗の方略帰属群にも自己効力感の上昇がみられている。さらに、Anderson & Jennings(1980)では、対人場面において失敗体験の原因帰属が次の行動の成功への期待にどのような影響を与えるのかが検討された。その結果、統制群に比べて失敗の原因を方略に帰属した群は成功への期待を高く、能力に帰属した群は成功への期待を低く認知するという結果が得られた。これらのことから、結果を特定の要因に帰属させるようなはたらきかけが自己効力感の認知に影響を及ぼすと考えられる。また、このような原因帰属に関する介入による自己効力感への影響を検討した研究は多くが学業場面において検討されたものであり、対人場面において原因帰属に関する介入による自己効力感への影響を検討した研究は少ない。しかし、これまで述べたように、原因帰属に関する介入研究以外の対人場面における自己効力感の研究においては、学業場面における自己効力感研究と類似した結果が見られている。このことから、原因帰属に関する介入は対人場面においても、自己効力感に影響を及ぼすと考えられる。さらに、方略帰属については、Clifford(1986)において、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性が示唆されている。つまり、失敗を方略に帰属すると、「今のやり方では失敗につながったから次はこんなやり方でやろう」という次の行動で用いるより効果的な方略の探求がなされることが考えられている。

方略と自己効力感の関係については、上述の伊藤（1996）の他にも多くの研究で検討されている（山田・堀・國田・中條，2009 など）。小野・鈴木・平（2009）は児童の授業内容の理解を促進する認知的方略の使用が無気力状態を予防し、自己効力感を形成することを示唆している。また、最上・亀島・宇恵（2008）は大学適応についての自己効力感と学習方略の間に正の相関があることを見いだしている。このように、効果的な方略は自己効力感にポジティブな影響を与えると考えられる。そのため、Clifford(1986)の、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされるという示唆をもとに考えると、失敗の方略帰属によって、効果的な方略を獲得し、その効果的な方略によって、自己効力感を高めることができると考えられる。本研究では、方略帰属と統制群を設けて、方略帰属が自己効力感に及ぼす影響について検討する。また、原因帰属過程自体が自己効力感に影響を及ぼすことも考えられる。よって、他の要因に帰属させる群も設定し、方略帰属群、他の要因に帰属させる群、統制群の3群の比較によって、帰属因の違いによる自己効力感の変化に及ぼす影響について検討する。方略以外の帰属因に関して、対人場面における原因帰属介入研究である Anderson & Jennings(1980)は、方略帰属群、統制群に加えて能力帰属群

を設けて、3群の比較により帰属させる要因の違いが成功への期待に及ぼす影響の違いが検討されているが、その結果、失敗の能力帰属は成功への期待を低めることが示唆されている。また、伊藤（1996）は、失敗の能力帰属群は失敗の努力帰属群に比べて自己効力感が低く認知することがすでに明らかにされている。よって本研究では、失敗体験においてどのような要因に帰属するのが望ましいのかを検討するために、予備調査を行う。予備調査では、大学生が会話場面での失敗の原因を帰属しやすい要因を明らかにし、その結果をもとに方略以外の帰属群を設定する。また、Weiner(1972),や Seligman(1991)が原因帰属の動機づけへの影響を示唆していることや、最上・亀島・宇恵（2008）大学適応自己効力感と学習方略、学習動機は正の相関を示すことを示唆しており、この他にも原因帰属や自己効力感と動機づけ的指標の関係を示した研究は多い。それらの研究に習い、本研究でも動機づけ的指標を測定する。さらに、方略帰属群において、Clifford(1986)が示唆するような失敗の方略帰属の後のより効果的な方略の探求がなされているのかを検討するため、方略帰属群と他の要因に帰属させた群が原因帰属後に有している方略を記述させ、記述に含まれるの有効性についても比較検討する。

## 【目的】

以上のことから、本研究では、方略帰属と統制群を設けて、対人場面における失敗の方略帰属が自己効力感に及ぼす影響について検討する。また、失敗の原因帰属過程自体が自己効力感に影響を及ぼすことも考えられるため、他の要因に帰属させる群も設定し、方略帰属群、他の要因に帰属させる群、統制群の3群の比較によって、帰属因の違いによる自己効力感の変化に及ぼす影響について検討する。方略以外の帰属因に関しては、予備調査を行い、大学生が会話場面での失敗の原因を帰属しやすい要因を明らかにし、その結果をもとに方略以外の帰属群を設定する。また、Weiner(1972),や Seligman(1991)が原因帰属の動機づけへの影響を示唆していることや、最上・亀島・宇恵（2008）大学適応自己効力感と学習方略、学習動機は正の相関を示すことを示唆しており、これらの研究をもとに、本研究でも動機づけ的指標を測定し、帰属群の違いによる影響の違いを検討する。

さらに、Clifford(1986)において、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆から方略帰属群においては、原因帰属後に他の要因に帰属させた場合よりも効果的な方略を有していると考えられる。そのため、方略帰属群と他の要因に帰属させた群が原因帰属後に有している方略の有効性についても比較検討する。その方法とし



ては、原因帰属後に次に初対面の人と話す場面において用いる方略を記述させ、その記述内容を分析し、2群を比較検討する。

実験場面としては、実験的統制をとることに加えて、後藤・大坊（2003）が大学生は概して、初対面の人との会話に苦手意識を感じていることを示唆していることから、大学生にとって初対面の人との会話場面は自己効力感が影響を受けやすい場面であると考え、初対面の人との会話場面に設定する。また、実験が会話場面において行われることを考えると、被験者の普段の他者との会話の頻度も関係してくるように思われる。そのため、他者との会話の頻度も測定し、自己効力感の変化との関係を検討する。

## — 予備調査 —

本研究では、方略帰属と統制群を設けて、対人場面における失敗の方略帰属が自己効力感に及ぼす影響について検討する。また、失敗の原因帰属過程自体が自己効力感に影響を及ぼすことも考えられるため、他の要因に帰属させる群も設定し、方略帰属群、他の要因に帰属させる群、統制群の3群の比較によって、帰属因の違いによる自己効力感の変化に及ぼす影響について検討する。そして、その帰属群の違いによって、自己効力感得点に違いが出るかを実験により、検討する。Anderson & Jennings(1980)では、方略以外の帰属因として能力が取り上げられているが、失敗の能力帰属は成功への期待を低めることが示唆されている。また、伊藤(1996)は、失敗の能力帰属群は失敗の努力帰属群に比べて自己効力感が低く認知することがすでに明らかにされている。このことから、本研究では、失敗体験においてどのような要因に帰属するのが望ましいのかを検討するために、予備調査を行う。予備調査では、大学生が会話場面での失敗の原因を帰属しやすい要因を自由記述形式の質問紙調査を行い、質問紙への回答の結果をカテゴリ分けした後に、回答数の多いカテゴリをもとに適切な帰属因を設定する。

## 【方法】

**対象** 国立M大学の学生。男子57名、女子32名の計89名。

**手続き** 質問紙による調査を行った。調査時期は2010年11月下旬。大学の講義時間中に配布し、回収した。

**質問紙** 「あなたが友人との話が盛り上がらないとき、その原因はどこにあると考えますか」という質問に対し、自由記述での回答を求めた。

## 【結果と考察】

被験者の回答を集計し、同一内容の記述や、似た内容の記述を集めて5人以上の回答があったものを1つのカテゴリとし、分類を行った。その結果、Table 4に示すように、「共通の話題がない、興味・関心が合わない」、「自分または相手の体調・気分・テンション」、「自分または相手のどちらかが話に興味を示していない」、「相手とあまり親しくない、相手のことが好きではない」、「自分の話し方・聴き方・態度」、「話題の面白さ、発展性のあ

る話かどうか」, 「相手の話し方・聴き方・態度」, 「話の他に気になるものがある」, 「相手との相性」の9つのカテゴリが見いだされた。

Table 3 友人との話が盛り上がらない原因のカテゴリと回答数

回答の多かったカテゴリ	回答数
共通の話題がない、興味・関心が合わない	45
自分または相手の体調・気分・テンション	32
自分または相手のどちらかが話に興味を示していない	20
相手とあまり親しくない、相手のことが好きではない	17
自分の話し方・聴き方・態度	14
話題の面白さ、発展性のある話かどうか	12
相手の話し方・聴き方・態度	8
話の他に気になるものがある	7
相手との相性	5

Table 4 より, 「共通の話題がない, 興味・関心が合わない」, 「自分または相手のどちらかが話に興味を示していない」, 「話題の面白さ, 発展性のある話かどうか」など話題に関するカテゴリへの回答数が最も多かった。また, 「自分の話し方・聴き方・態度」のように今回取り上げる方略帰属に当たるような記述も少数ではあるがみられた。「自分の話し方・聴き方・態度」のカテゴリを除くと, 「自分または相手の体調・気分・テンション」, 「相手とあまり親しくない相手のことが好きではない」, 「相手の話し方・聴き方・態度」, 「話の他に気になるものがある」, 「相手との相性」は被験者自身の行動以外に関する回答であった。さらに, 最も回答の多かった話題に関する3つのカテゴリとも被験者自身の行動以外に関するものであることが共通していた。このことから, 大学生は会話場面での失敗体験を自分自身の行動以外の要因に帰属することが多いことがわかった。以上のことから, 本実験では, 被験者自身の行動以外の要因に帰属させる群を設けることとし, 外的要因帰属群と命名した。よって, 本実験では, 方略帰属群とこの外的要因帰属群, 統制群の3群設定し, 各群の間の自己効力感の変化の違いを検討する。

# 一本実験

## 【方法】

**対象** 国立M大学生 30名。なお、後述する群分けに従い、方略帰属群 10名、外的要因帰属群 10名、統制群 10名とした。

**手続き** (実験の流れ)

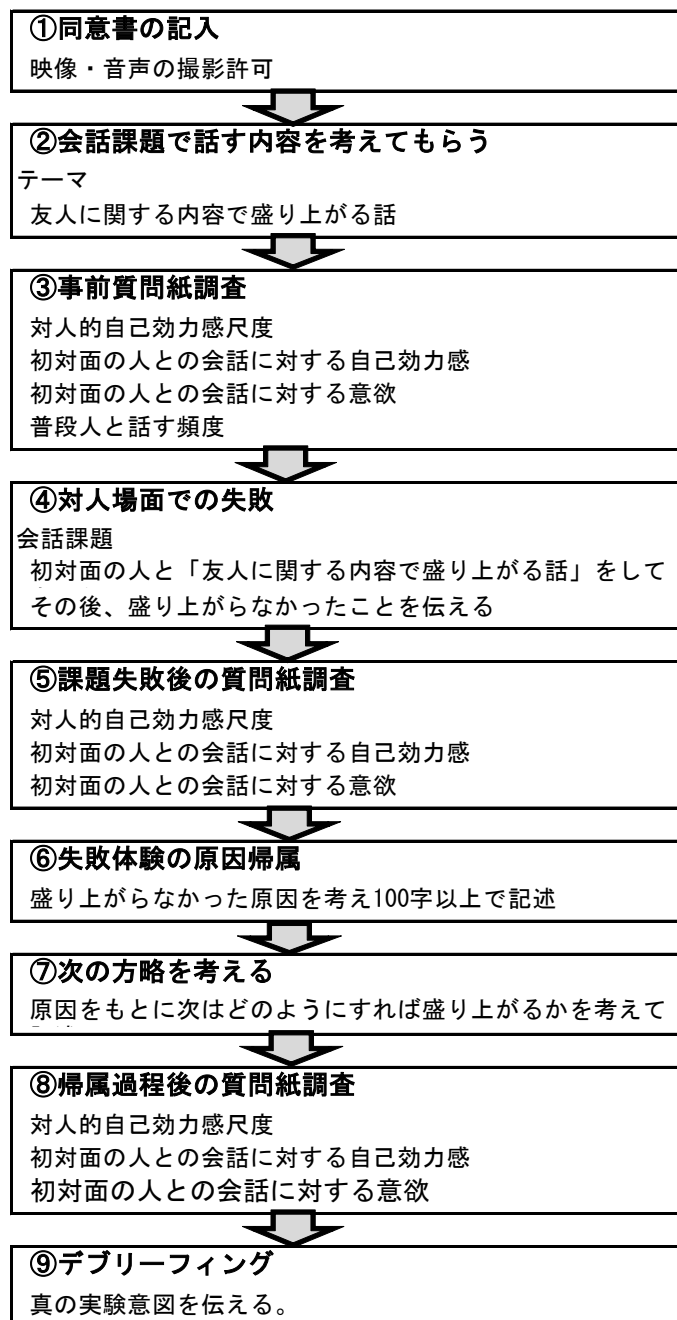


Figure 2 実験概要図

実験時期は2010年11月下旬から12月中旬。大学の講義時に、実験内容を説明し、実験に協力してくれる学生30名を募集し協力してもらった。実験内容については、大学生の会話に関する研究を行っており、初対面の人とお題の話題について盛り上がるような話をしてもらい、質問紙にこたえる実験だと説明した。協力を申し出てくれた学生には後日実験室に来てもらい、実験協力者である初対面の人と友人に関する内容で盛り上がる話をするという実験を行った。

実験の流れとしては、まずは5分間で初対面の人と話す内容を考えてもらった。次に、同じ条件で実験を受けているという設定の実験協力者に入室してもらい、初対面の人との会話課題に取り組んでもらった。なお、この会話課題は必ずそれほど盛り上がらないという経験をするようになっている。課題終了後、会話があまり盛り上がらなかったことを被験者に伝える。その後、各群の条件に従って、5分間で会話が盛り上がらなかった原因・考えた原因をふまえた上で、どのようにすれば初対面の人との会話を盛り上げることが出来るかについてそれぞれ5分間で考え、記述してもらった。最後に、デブリーフィングを行って、実験を終了した。実験全体を通して40分程度の時間を要した。

なお対人的自己効力感・初対面の人と会話することに対する自己効力感・初対面の人と会話することに対する意欲・については事前・課題失敗後・帰属過程後の3時点の質問紙において、回答してもらった。さらに事前の質問紙においては普段人と話す頻度についても回答を求め、それらの得点をもとに、分析を行った。

(実験室の様子)

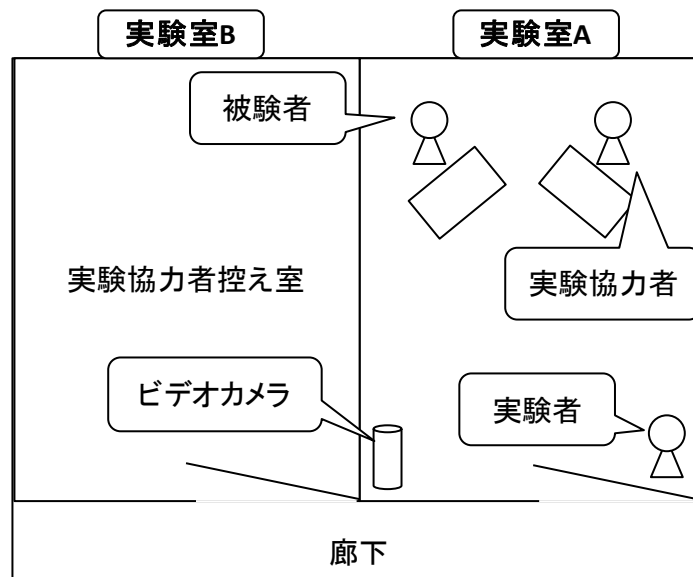


Figure 3 実験の様子

被験者は実験開始時に実験室 A に入室し、実験終了まで実験室 A で実験を受けた。実験協力者は会話課題に取り組むときのみ、実験室 A に入室し、会話課題終了後すぐに退出した。会話課題以外の時間、実験協力者は控え室となっている実験室 B で待機した。実験者は実験中絶えず被験者のいる実験室 A と実験室 B を往復し、実験協力者が同じ条件で実験を受けている被験者であるように振る舞った。被験者が座る席には質問紙回答などに用いる筆記用具・メモ用紙を置いた。また実験中の被験者の様子を観察し分析に用いるため実験室の角にビデオカメラを 1 台設置し実験の様子を撮影した。

### ①同意書の記入

被験者に入室してもらい、実験者から偽の実験意図・映像記録・実験の中止に関する説明をした。その後、被験者に同意書に署名してもらい、映像と音声を記録する許可を取った。

#### 教示

実験者：「本日の実験は、大学生はどのような話題で盛り上がるのかということを検証する実験です。その際、分析のため実験の様子をビデオ撮影させていただきます。撮影した映像については、あなたのプライバシーが侵害されないよう最大限の注意を払い、研究に関わるもの以外に触れられることはありません。実験では、一定時間見知らぬ方との会話をしていただき、さらにいくつかの質問紙に解答していただきます。途中で実験をとりやめ

たい場合はいつでもとりやめられます。その際には、私（実験者）に気軽に声をかけてください。同意書に目を通していただき、同意していただけるようでしたら日付と名前のサインをお願いします。」

## ②会話課題で話す内容を考えてもらう

被験者に「友人に関する内容で盛り上がる話」をしてもらうことを伝え、どのような話をするかを5分間で考えてもらう。その際、被験者が座った席には筆記用具が準備されており、メモをとれる状態にしておいた。また、このときにもう一人の被験者（実際には実験協力者）がいて、同時に二部屋で実験を行っている被験者に伝え、これ以降実験者は1つのことをするたびにもう一方の部屋と往復し、あたかも同時に2つの部屋で同時に実験を行っているかのように振る舞った。

### 教示

実験者「先ほども説明しましたように、本日の実験は、大学生はどのような話題で盛り上がるのかということを検証する実験です。今回、別室であなたと同じ説明を受けている実験参加者がいます。その方と後で会話をしていただきます。話すテーマは『友人に関する内容で盛り上がる話』です。それでは、今から5分間でどんな話をするか1トピック分考えていただきたいと思います。そちらに用意してある紙とペンでメモをとっていただいてもかまいません。では、私は5分後に戻ってきます。なお、実験を2部屋同時に進行しているため、実験中、頻繁にドアから出入りをしますが、その点はご了承ください。それでは、5分間考えてください。」

## ③事前の質問紙調査

被験者に事前の質問紙を渡し、回答してもらった。

質問紙の構成

### 1.対人的自己効力感尺度

対人的自己効力感尺度（松島・塩見，2001）の対人スキルに関する自信下位尺度14項目を使用した。なお松島・塩見（2001）での「少しはあてはまる」を本研究では「あまりあてはまらない」に修正して使用した。また得点化についても、1.全くあてはまらない、2.あまりあてはまらない、3.どちらともいえない、4.大体あてはまる、5.非常にあてはまるの5件法で回答を求めた。事前質問紙では被験者に会話の盛り上がりに関する質問紙だと思わ

せるため、最初に話の盛り上がりに関する項目（分析には使用しない）を 5 項目追加した。

## 2.初対面の人との会話に対する自己効力感

「あなたは初対面の人とどのくらい上手く会話できると思いますか？最大を 100%として、現在のあなたは何%くらいか下の記入欄にお答えください。」という教示文で「0%」から「100%」までの 11 件法で回答を求めた。

この初対面の人との会話に対する自己効力感の測定に関しては、特定のマグニチュードをもった行動をどのくらい確実に遂行できるかという確信の強さである自己効力感の強度を自己効力感得点の指標として測定した。

## 3.初対面の人との会話に対する意欲

「あなたの初対面の人と会話することに対する意欲はどのくらいですか？現在のあなたに当てはまるところの数字に○をつけてください。」という教示文で「全く話したいと思わない」から「とても話してみたいと思う」までの 11 件法で回答を求めた。

## 4.普段人と話す頻度（事前質問紙のみ）

「あなた普段友人とどのくらい話しますか？あなたに当てはまるところの数字に○をつけてください。」という教示文で「全く話さない」から「よく話す」までの 11 件法で回答を求めた。

### ④対人場面での失敗

被験者に会話課題の流れを説明し、実験協力者を入室。実験者からのそれぞれの紹介が終了し、実験者の合図で初対面の人との会話課題を開始させた。なお、この際被験者と実験協力者は完全に初対面で同性となるように組み合わせた。会話課題では、被験者は実験協力者と友人に関する内容で盛り上がる話を 1 トピックずつ話してもらった。なお、この会話課題場面においては実験統制のため、必ず実験協力者から話し始め、実験協力者が話す内容についても事前に実験者が準備したシナリオ通り話してもらった。なお、被験者からの質問があった場合には「友人から聞いた話なのでよくわかりません。」などのあいまいな返答をしてもらった。その後被験者に話してもらうが、その間実験協力者は相槌を打つなどして聞くが、笑わずに盛り上がっていない風に振る舞ってもらった。お互いに 1 トピックずつ話したところで、実験者が終了の合図をし、実験協力者は退出し、被験者には会話課題の盛り上がりの評定する質問紙に回答してもらった。この質問紙をすぐに回収し、得点の集計結果として被験者に実験協力者との会話が盛り上がらなかったこと（対人場面



での失敗) を伝えた。

#### 教示と詳細な流れ

実験者：「この研究では、大学生の話はどのような話題が盛り上がるのかということに関する実験を行います。現在、別室でもう1人あなたと同じ説明を受けている実験参加者がいます。これからその方に入室してもらいます。その方と先ほど説明したように『友人に関する内容で盛り上がる話』を1トピックずつお話してください。その方を今から私が呼んできますので、その方が入室し、私をはじめの合図を出したら、実験を開始してください。何かわからないことはありますか？それでは、始めてください。」

＜実験協力者入室したら、実験者が紹介。その後実験開始。＞

実験協力者から話し始める（実験協力者もメモを持つ）

実験協力者「あ、じゃあ、私から話しますね。盛り上がるかどうかはわかんないんですけど、私の友だちに〇〇って子がいて、〇〇が最近バイトを始めたらしいんですよ。〇〇がすごいところでバイトを始めたって言うから、聞いてみたんですけど。コンビニでバイトし始めたらしいんですよ。普通ですよ。へーみたい。で、コンビニのバイトについて色々聞いたんですよ。コンビニのバイトってそんなに仕事の種類多くないと思うんですけど、なんか〇〇が言うには、めっちゃ多いらしいんですよ。レジとか他にもいろいろあると思うんですけど、やっぱりレジをしてるときに面白いことが多いらしいんですよ。なんか夕方くらいの時間には服装が面白い人が来るらしくて、それも結構な頻度で来るらしいんですよ。〇〇が言うには、たまに服装の面白い人がレジに並んじゃうこともあるらしくて、すごいらしいですよ。大変ですよ。あ、じゃあ次どうぞ話してください。」

被験者が話す

被験者「・・・考えた話を話す・・・」

実験協力者は相槌を打って聞くが、笑わず会話が盛り上がっていない風に振る舞う。

被験者が話し終えたら、実験者が終了の合図を出す。

実験者：「終わってください。では、お二方にはこれから用紙に解答していただきたいと思っています。◇◇さんはこちらの部屋で、△△さんは元の部屋にある用紙に解答をお願いします。」

＜実験協力者退出。被験者は質問紙（盛り上がり度等）に回答その後実験者が回収＞

実験者：「解答が終了しましたので、回収させていただきます。すぐに得点を集計し結果をお伝えしますので、少しの間お待ちください。その際、待っている間に部屋から出ないで

ください。また、携帯電話などで人と話したり、連絡を取ったりしないようにしてください。」

＜実験者が退出・5分後再び入室＞

実験者：「お待たせしました。先ほどの実験の結果ですが、残念ながらあなたと〇〇さんの質問紙の得点から判断すると、先ほどの会話はそれほど盛り上がりませんでしたようです。」

## ⑤課題失敗後の質問紙調査

被験者に事前の質問紙を渡し、回答してもらった。

質問紙の構成

### 1.対人的自己効力感尺度

対人的自己効力感尺度（松島・塩見，2001）の対人スキルに関する自信下位尺度 14 項目を使用した。なお松島・塩見（2001）での「少しはあてはまる」を本研究では「あまりあてはまらない」に修正して使用した。また得点化についても，1.全くあてはまらない，2.あまりあてはまらない，3.どちらともいえない，4.大体あてはまる，5.非常にあてはまるの 5 件法で回答を求めた。

### 2.初対面の人との会話に対する自己効力感

初対面の人との会話に対する自己効力感に関する項目は，事前の質問紙と同様。

### 3.初対面の人との会話に対する意欲

初対面の人との会話に対する意欲に関する項目は，事前の質問紙と同様。

## ⑥失敗体験の原因帰属

課題失敗後の質問紙への回答が終了したら，各群の条件に従って，5 分間で会話が盛り上がりなかった原因について考え，100 字以上でできるだけ詳しく記述してもらった。

教示

実験者「ありがとうございました。それでは，次はこちらの用紙をご覧ください。そちらの用紙の説明にもあるように，今から 5 分間は先ほどの会話が盛り上がりなかった原因について，…（帰属因ごとの教示）で考えて，下の回答欄に記述していただきたいと思います。回答は横書きで，100 字以上でできるだけたくさん詳しく書いてください。」

方略帰属教示群

実験者「今回の話が盛り上がりなかった原因について，あなたの会話の仕方・話の展開の

させ方・相手に対する接し方などで考えられることをこちらの質問紙にお答えください。」

#### 外的要因帰属群

実験者「今回の話が盛り上がらなかった原因について、あなたの行動に関するもの以外で考えられるもの今からこちらの質問紙にお答えください。」

#### 統制群

帰属過程を設けない。5分間実験者が席を外し、その間待ってもらう。

実験者「もう一方の実験を見てきますので、少々お待ちください。」

### ⑦次の方略を考える

原因帰属過程で考えた原因をふまえた上で、どのようにすれば初対面の人との会話を盛り上げることが出来るかについて考え記述してもらった。時間はこちらも5分間でできるだけ詳しく記述してもらった。なお統制群については次に初対面の人と話すときにはどのような話をするかということについて他の2群と同様の手続きで記述してもらった。

なお、上述のように、Clifford(1986)において、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性が示唆されている。これをもとに考えると、方略帰属群と外的要因帰属群の各群が考えた方略の間に有効性の違いなどが生じると考えられる。よって、本研究では方略帰属群と外的要因帰属群の各群が考えた方略記述を比較することで、各群が考えた方略の間に有効性の違いなど有効性の違いなどが生じるかどうかを検討するため、「⑦次の方略を考える」という過程を設定した。

#### 教示

実験者「ありがとうございます。それでは、次はこちらの用紙をご覧ください。これから5分間で、さきほどの原因をふまえた上で、次にどうすれば会話を盛り上げることができるか考えて、こちらの用紙に記述していただきたいと思います。またこちらについても回答は横書きで、できるだけたくさん詳しく書いてください。」

### ⑧帰属過程後の質問紙調査

被験者に帰属過程後の質問紙を渡し、回答してもらった。

#### 質問紙の構成

#### 1.対人的自己効力感尺度

対人的自己効力感に関する項目は、課題失敗後の質問紙と同様。

また、帰属過程後の質問紙では、会話に関する感情の項目を 10 項目ほど追加し、対人的自己効力感尺度の項目の順番も変えて使用した。

### 2.初対面の人と会話することに対する自己効力感

初対面の人との会話に対する自己効力感に関する項目は、事前の質問紙と同様。

### 3.初対面の人と会話することに関する意欲

初対面の人との会話に対する意欲に関する項目は、事前の質問紙と同様。

## ⑨デブリーフィング

事後の質問紙に回答してもらった後、本当の実験意図や内容を説明し、謝礼を渡した。

### 教示

実験者「ありがとうございます。これで実験の内容は全て終了しました。本日は調査にご協力いただき、本当にありがとうございました。今回の調査は、対人場面における『失敗』の『原因を考えること』が自信のような感覚である『自己効力感』にどのような影響を及ぼすのかについて検討するために行ったものです。

みなさんにお答えいただいた質問項目群は対人場面における『自己効力感』である『対人的自己効力感』に関するものでした。この尺度は対人的場面において適切な社会的行動を行うことがどの程度自分に可能であるかについての程度を測るものです。先行研究から、人はこの対人的自己効力感が高く認知すると、対人関係の開始や維持が円滑になるということが示されています。

2つ目・3つ目・4つ目の質問項目は、それぞれあなたの初対面の人と会話することに対する意欲・初対面の人と会話することに対する自己効力感・人と話す頻度に関するものでした。これらは今回の実験状況や課題を考えると分析のために必要なデータであると判断し、測定しました。

また、最後の質問紙の前に 100 文字でお答えいただいたものは失敗の原因を考えることに関するものです。あなたに教示文にしたがって、原因を考えて記述していただくことで教示文に示された要因に帰属していただくことをねらいとしたものでした。

失敗は一般的に自己効力感を低めるとされています。しかし、先行研究によると、失敗の原因をどこに帰属するかによって自己効力感に及ぼす影響が違ってくることが示唆されています。そこで、失敗の原因をどのような要因に帰属すると、次の行動への自己効力感を高く感じさせることができるのかを検討するため、今回の実験を行いました。

よって、今回の実験では実験に参加した方全員が失敗するようになっており、実験中に話していただいた方も私が協力をお願いした実験協力者でした。そのため、話が盛り上がらなかったような実験協力者の行動は、あなたの話の内容や話し方が原因ではありません。また、盛り上がらなかったというような評定も実際にはされておらず、事前に準備されたものでした。実際に、会話が終了し、それぞれの部屋に別れたときに、実験協力者はすごく話が面白かったと言っていました。あなたに話が盛り上がらないことを体験していただき、また真の実験意図を伝えずに実験を行う形になってしまい、申し訳ありません。

なお、この実験はしばらく続きますので、今年いっぱいほどのような実験だったかということは他の人に言わないようにしてください。

今回の調査の分析結果などについてお問い合わせ、ご質問がありましたら、教育学部人間発達科学課程人間発達科学コース松谷健二までご連絡ください。ただし、個人情報の保護に万全を期すため、全てのデータを入力した後に質問紙はシュレッダーにかけ、入力したデータにつきましても個人情報を消去して分析しますので、集計後の個人得点など個人的なデータについてはお答えできません。また、分析結果につきましては、データ入力および分析に多少の時間が必要であるため、お答えできるのは今学期終了後となることをご理解ください。

協力していただいたお礼にこちらを差し上げます。本日は実験にご協力いただき本当にありがとうございました。」

## 【結果】

### 1. 尺度構成

#### 1-1) 対人的自己効力感

先行研究の尺度構成に従い対人的自己効力感尺度（松島・塩見，2001）の対人スキルに関する自信下位尺度 14 項目の得点を合計し，項目数で割ったものを下位尺度得点とした。この得点の実際に得られた事前の最小値は 2.21，最大値は 3.93，課題失敗後の最小値は 2.14，最大値は 3.71，帰属過程後の最小値は 2.21，最大値は 3.71 であった。内的整合性を検討するために，Cronbach の  $\alpha$  係数を算出したところ，Table 1 に示す通り，事前： $\alpha=.844$ ，課題失敗後： $\alpha=.789$ ，帰属過程後  $\alpha=.808$  であり，十分な値が得られた。下位尺度得点の事前の平均値は 3.07，標準偏差は 0.63，課題失敗後の平均値は 2.74，標準偏差 0.47 は，帰属過程後の平均値は 2.78，標準偏差は 0.50 であった。

Table 4 対人的自己効力感の平均値・標準偏差

	事前			課題失敗後			帰属過程後		
	Mean	SD	$\alpha$ 係数	Mean	SD	$\alpha$ 係数	Mean	SD	$\alpha$ 係数
対人的自己効力感	3.07	.63	.844	2.74	.47	.789	2.78	.50	.808

注) 対人的自己効力感の値は1から5の間をとる。

#### 1-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感

初対面の人との会話に対する自己効力感 は 1 項目のため，そのまま尺度得点とした。この得点の実際に得られた事前の最小値は 0，最大値は 7，課題失敗後の最小値は 0，最大値は 6，帰属過程後の最小値は 0，最大値は 7 であった。初対面の人との会話に対する自己効力感について平均値と標準偏差を算出したところ，Table 2 に示す通り，初対面の人との会話に対する自己効力感の事前の平均値は 4.55，標準偏差は 1.90，課題失敗後の平均値は 3.70，標準偏差は 1.70，帰属過程後の平均値は 4.27，標準偏差は 1.96 であった。

Table 5 初対面の人との会話に対する自己効力感の平均値・標準偏差

	事前		課題失敗後		帰属過程後	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
初対面の人との会話に対する自己効力感	4.55	1.90	3.73	1.70	4.27	1.96

注) 初対面の人との会話に対する自己効力感の値は1から10の間をとる。

#### 1-3) 初対面の人との会話に対する意欲

初対面の人との会話に対する意欲は 1 項目のため、そのまま尺度得点とした。この得点の実際に得られた事前の最小値は 1, 最大値は 10, 課題失敗後の最小値は 1, 最大値は 10, 帰属過程後の最小値は 1, 最大値は 10 であった。初対面の人との会話に対する意欲について平均値と標準偏差を算出したところ、Table 3 に示す通り、初対面の人との会話に対する自己効力感の事前の平均値は 5.86, 標準偏差は 1.98, 課題失敗後の平均値は 5.45, 標準偏差は 2.06, 帰属過程後の平均値は 5.59, 標準偏差は 1.97 であった。

Table 6 初対面の人との会話に対する意欲の平均値・標準偏差

	事前		課題失敗後		帰属過程後	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
初対面の人との会話に対する意欲	5.86	1.98	5.45	2.06	5.59	1.97

注) 初対面の人との会話に対する自己効力感の値は1から10の間をとる。

#### 1-4) 普段人と話す頻度

普段人と話す頻度は 1 項目のため、そのまま尺度得点とした。この得点の実際に得られた最小値は 4, 最大値は 10 である。普段人と話す頻度について平均値と標準偏差を算出したところ、Table 4 に示す通り、普段人と話す頻度の平均値は 8.05, 標準偏差は 1.70 であった。

Table 7 普段人と話す頻度の平均値・標準偏差

	Mean	SD
普段人と話す頻度	8.05	1.70

注) 普段人と話す頻度の値は0から10の間をとる。

なお、課題の失敗体験後に対人的自己効力感が高まった 7 人については、課題の失敗によって自己効力感が低減されることを想定した本研究の趣旨に合致しないため、以下の分析から除外した。さらに、事前の対人的自己効力感が平均値±2SD の得点を示した 1 人についても、外れ値として以下の分析から除外し、残り 22 人の回答を対象として、分析を行った。その 22 人の内訳は方略帰属群 8 人、外的要因帰属群 7 人、統制群 7 人であった。

## 2. 各帰属群における対人的自己効力感得点・初対面の人との会話に対する自己効力感得点の変化の比較

方略帰属群，外的要因帰属群，統制群，各時点の対人的自己効力感得点・各時点の初対面の人との会話に対する自己効力感の，3×3（事前・課題失敗後・帰属過程後×方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の各下位尺度得点の比較を行った。

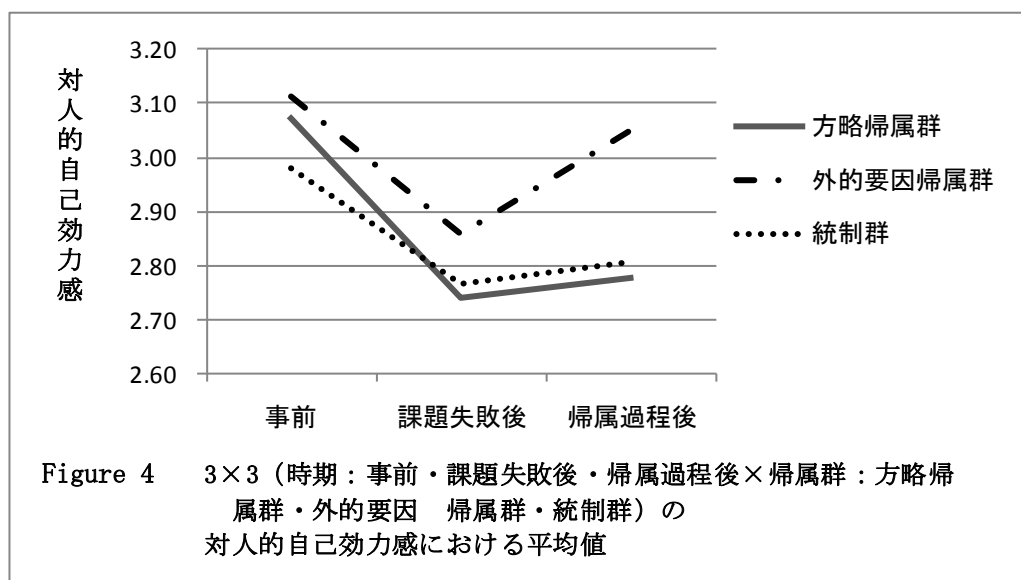
### 2-1) 対人的自己効力感との関係

被験者の事前・課題失敗後・帰属過程後のそれぞれの時点の質問紙における，対人的自己効力感得点の平均値と標準偏差を算出した。結果を Table 5 に示す。

Table 8 対人的自己効力感の平均値・標準偏差

	事前		課題失敗後		帰属過程後	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
全体 (N=22)	3.06	.52	2.79	.46	2.87	.48
方略帰属群 (n=8)	3.07	.63	2.74	.47	2.78	.50
外的要因帰属群 (n=7)	3.11	.46	2.86	.46	3.05	.47
統制群 (n=7)	2.98	.52	2.77	.50	2.81	.49

さらに Table 5 に示した平均値をもとに，各帰属群の対人的自己効力感得点の比較を行うため，対人的自己効力感を従属変数とした，3×3（時期：事前・課題失敗後・帰属過程後×帰属群：方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の 2 要因分散分析を行った。結果を Figure 4 に示す。



2 要因分散分析の結果より，時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）の主効果 ( $F(2,38)$ )



=22.50,  $p < .05$ ) がみられた。時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）の主効果がみられたので、多重比較を行ったところ、事前と課題失敗後の間、課題失敗後と帰属過程後の間で時期の主効果が有意であった。また、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）と帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）との交互作用はみられなかった。

また、各群の初対面に人との会話に対する自己効力感の変化の様子を比較してみると、事前と課題失敗後の間では、主効果がみられているように、すべての群で初対面に人との会話に対する自己効力感が低減されている。さらに、課題失敗後と帰属過程後の間では、有意差はないが、3群とも上昇傾向を示している。各群の課題失敗後と帰属過程後の対人的自己効力感の差得点をとってみると、方略帰属群 0.04、外的要因帰属群 0.19、統制群 0.04 であり、外的要因帰属群が最も上昇して方略帰属群と統制群はほぼ同程度上昇していた。

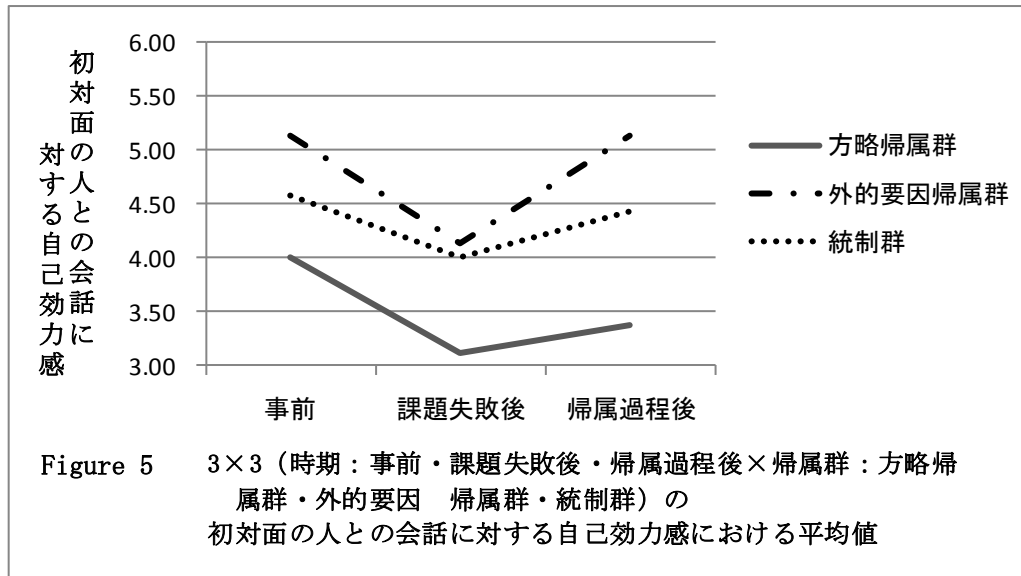
## 2-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感との関係

被験者の事前・課題失敗後・帰属過程後のそれぞれの時点の質問紙における、初対面の人との会話に対する自己効力感得点の平均値と標準偏差を算出した。結果を Table 6 に示す。

Table 9 初対面の人との会話に対する自己効力感の平均値・標準偏差

	事前		課題失敗後		帰属過程後	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
全体 (N=22)	4.55	1.90	3.73	1.70	4.27	1.96
方略帰属群 (n=8)	4.00	2.14	3.13	1.89	3.38	1.85
外的要因帰属群 (n=7)	5.14	1.46	4.14	1.35	5.14	1.95
統制群 (n=7)	4.57	2.07	4.00	1.83	4.43	1.90

さらに、Table 6 に示した平均値をもとに、各帰属群の初対面の人との会話に対する自己効力感得点の比較を行うため、初対面の人との会話に対する自己効力感を従属変数とし、3×3（時期：事前・課題失敗後・帰属過程後×帰属群：方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の2要因分散分析を行った。結果を Figure 4 に示す。



2 要因分散分析の結果より、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）の主効果 ( $F(2, 38) = 10.22, p < .01$ ) がみられた。時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）の主効果がみられたので、多重比較を行ったところ、事前と課題失敗後の間、課題失敗後と帰属過程後の間で時期の主効果が有意であった。また、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）と帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）との交互作用はみられなかった。

また、各群の対人的自己効力感の変化の様子を比較してみると、事前と課題失敗後の間では、主効果がみられているように、すべての群で対人的自己効力感が低減されている。さらに、課題失敗後と帰属過程後の間では、有意差が見られているとおり、3群とも上昇している。各群の課題失敗後と帰属過程後の初対面の人との会話に対する自己効力感の差得点をとってみると、方略帰属群 0.25、外的要因帰属群 1.00、統制群 0.43 であり、外的要因帰属群が最も上昇しており、その次に統制群であり、方略帰属群は最も上昇する幅が小さかった。

### 3. 各帰属群における対人的自己効力感得点・初対面の人との会話に対する自己効力感得点と普段人と話す頻度の関係

被験者の事前質問紙において測定した、普段人と話す頻度得点の平均値と標準偏差を算出した。結果を Table 7 に示す。

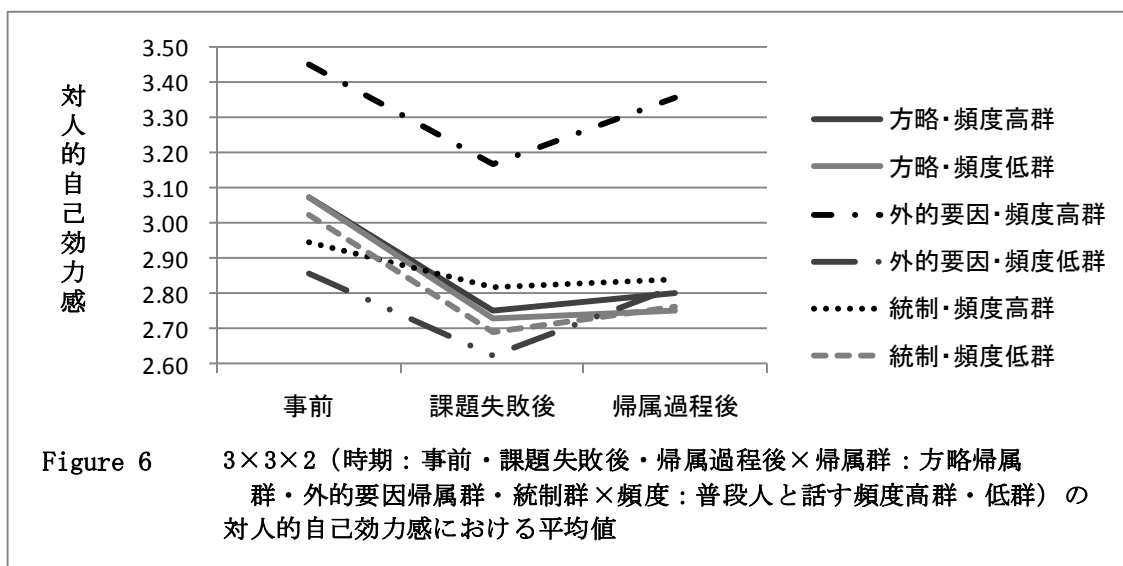
Table 11 普段人と話す頻度の平均値・標準偏差

	Mean	SD
全体 (N=22)	8.05	1.70
方略帰属群 (n=8)	8.25	1.67
外的要因帰属群 (n=7)	7.71	1.70
統制群 (n=7)	8.14	1.95

方略帰属群, 外的要因帰属群, 統制群, 各時点の対人的自己効力感得点・各時点の初対面の人との会話に対する自己効力感, 普段人と話す頻度の,  $3 \times 3 \times 2$  (時期: 事前・課題失敗後・帰属過程後  $\times$  帰属群: 方略帰属群・外的要因帰属群・統制群  $\times$  頻度: 高群・低群) の各下位尺度得点の比較を行った。なお, 普段人と話す頻度得点については, 事前質問紙における普段人と話す頻度得点を平均値 (8.05) によって高群 (n=11) と低群 (n=11) に分けた。その結果, 方略帰属・頻度高群 4 人, 方略帰属・頻度低群 4 人, 外的要因帰属・頻度高群 3 人, 外的要因帰属群 4 人, 統制・頻度高群 4 人, 統制・頻度低群 3 人となった。

### 3-1) 対人的自己効力感との関係

対人的自己効力感を従属変数とし,  $3 \times 3 \times 2$  (事前・課題失敗後・帰属過程後  $\times$  方略帰属群・外的要因帰属群・統制群  $\times$  頻度高群・低群) の 3 要因分散分析を行った。結果を Figure 5 に示す。



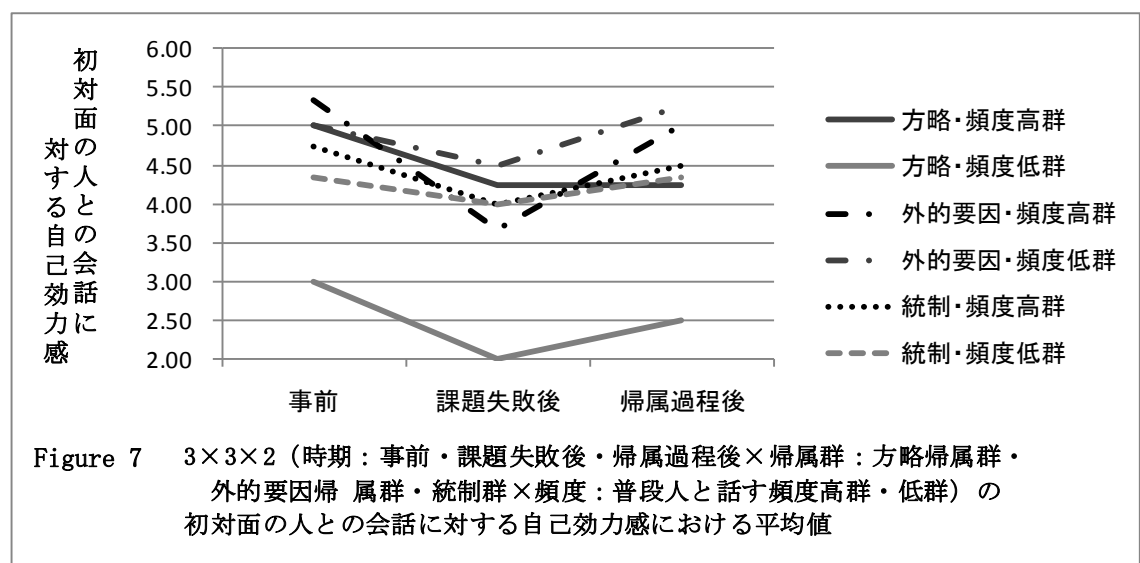
3 要因分散分析の結果より, 時期 (事前・課題失敗後・帰属過程後) の主効果がみられた ( $F(2,32) = 21.03, p < .01$ )。時期 (事前・課題失敗後・帰属過程後) の主効果, がみら

れたので、多重比較を行ったところ、事前と課題失敗後の間で時期の主効果が有意であった。また、交互作用はみられなかった。

また、各群の対人的自己効力感の変化の様子を比較してみると、事前と課題失敗後の間では、主効果がみられているように、すべての群で対人的自己効力感が低減されている。さらに、課題失敗後と帰属過程後の間では、有意差はないが、6群とも上昇傾向を示している。しかし、意欲の得点の違いによって、一貫した傾向はみられなかった。

### 3-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感との関係

初対面の人との会話に対する自己効力感を従属変数とし、 $3 \times 3 \times 2$  (時期：事前・課題失敗後・帰属過程後 × 方略帰属群・外的要因帰属群・統制群 × 頻度高群・低群) の3要因分散分析を行った。結果を Figure 7 に示す。



3要因分散分析の結果より、時期(事前・課題失敗後・帰属過程後)の主効果( $F(2, 32) = 9.94, p < .01$ )がみられた。時期(事前・課題失敗後・帰属過程後)の主効果がみられたので、多重比較を行ったところ、事前と課題失敗後の間、課題失敗後と帰属過程後の間で時期の主効果が有意であった。また、交互作用はみられなかった。

また、各群の初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の様子を比較してみると、事前と課題失敗後の間では、主効果がみられているように、すべての群で初対面の人との

会話に対する自己効力感が低減されている。さらに、課題失敗後と帰属過程後の間では、有意差が見られているとおり、3群とも上昇している。しかし、意欲の違いによって一貫した傾向は見られなかった。

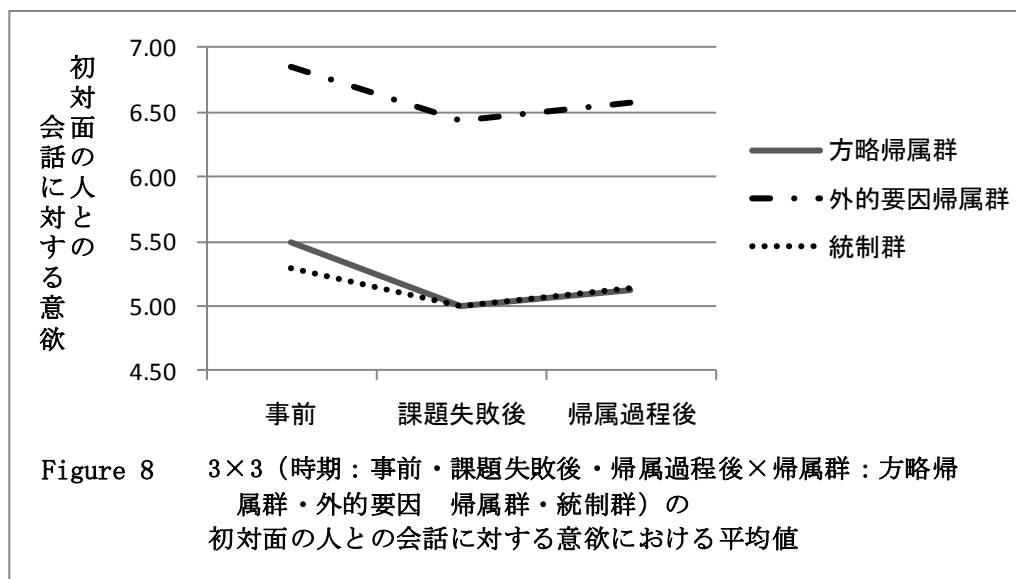
#### 4. 各帰属群における初対面の人との会話に対する意欲得点の比較

被験者の事前・課題失敗後・帰属過程後のそれぞれの時点の質問紙における、初対面の人との会話に対する意欲得点の平均値と標準偏差を算出した。結果を Table 3 に示す。

Table 10 初対面の人との会話に対する意欲の平均値・標準偏差

	事前		課題失敗後		帰属過程後	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
全体 (N=22)	5.86	1.98	5.45	2.06	5.59	1.97
方略帰属群 (n=8)	5.50	1.77	5.00	2.00	5.13	1.46
外的要因帰属群 (n=7)	6.86	1.86	6.43	1.90	6.57	1.90
統制群 (n=7)	5.29	2.21	5.00	2.24	5.14	2.41

方略帰属群、外的要因帰属群、統制群、各時点の初対面の人との会話に対する意欲の、3×3（事前・課題失敗後・帰属過程後×方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の各下位尺度得点の比較を行うため、初対面の人との会話に対する意欲を従属変数とし、3×3（時期：事前・課題失敗後・帰属過程後×帰属群：方略帰属群・外的要因帰属群・統制群×頻度高群・低群）の2要因分散分析を行った。結果を Figure 8 に示す。



2 要因分散分析の結果より、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）の主効果、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）はみられなかった。また、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）と帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）交互作用はみられなかった。

また、各群の初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の様子を比較してみると、事前と課題失敗後の間でも、課題失敗後と帰属過程後の間でも、有意差が見られず、3群とも得点の変化もあまり見られなかった。

## 5. 方略帰属群・外的要因帰属群における次の試行の方略記述の文字数・記述内容の比較

実験中の手続き「⑦次の方略を考える」において被験者に記述してもらった次の試行の方略記述の文字数と内容について、方略帰属群と外的要因帰属群の比較を行った。

### 5-1) 次の試行の方略記述の文字数の比較

実験中の手続き「⑦次の方略を考える」において、方略帰属群・外的要因帰属群の被験者が記述した次の試行の方略の文字数の平均値と標準偏差を算出した。また、次の試行の方略の文字数に関して、帰属群による違いを検討するために、帰属群を独立変数、次の試行の方略記述の文字数を従属変数としたt検定を行った。結果をTable 11に示す。

	方略帰属群 (n=8)		外的要因帰属群 (n=7)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	
次の試行の方略記述の文字数	167.00	27.56	147.29	17.49	1.62
					n.s.

Table 11 より、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群）による有意差はみられなかった。

### 5-2) 次の試行の方略記述の内容の比較

実験中の手続き「⑦次の方略を考える」において、方略帰属群・外的要因帰属群の被験者が記述した次の試行の方略の内容をもとに、著者が方略の分類を行った分類の方法としては、方略記述の分析対象となった15人の被験者すべての記述を読み、同一の記述や、似た内容の記述を1つのカテゴリとし、分類を行った。その結果、Table 10に示したように、6パターンの方略が見出された。

Table 12 方略の分類と具体例

方略	具体例
1. 互いの情報の交換	自己紹介をする、話の登場人物の説明、相手のことを知る
2. 共通点の模索	共通の話題を探す、共通で話せる話題を持って来る
3. 話せるネタを増やす	普段から話題を探しておく、話の引き出しを多くしておく
4. 臨機応変な話題の切り替え	相手の態度に合わせて話題を変える
5. 相手の話への傾聴的態度	相手の話に対するあいづち、笑顔で聞く、質問する
6. 話し方の工夫	笑顔で話す・相手へのなげかけ

Table 10 に示した 6 パターンの方略を基準として、2 人の評定者に方略帰属群・外的要因帰属群の被験者が記述した次の試行の方略の内容を見て、それぞれの被験者の記述にどのような方略が含まれているか評定してもらった。また、それぞれの被験者の記述内容全体に含まれる方略の実行可能性についても評定してもらった。記述全体に含まれる方略の実行可能性については、「各記述を読み、その中に含まれる方略がどのくらい実行可能かを 0.全く実行できそうにない～6.実行可能の 6 段階で評定してください。」という教示文で評定してもらった。なお、評定者については、普段からソーシャルスキルトレーニングと構成的グループエンカウンターを理論的背景としたボランティア活動に参加し、コミュニケーションに対する理解が深い大学生の男女 1 名ずつに依頼した。1 度目の評定は 2 名の評定者がそれぞれ独立に行い、一度目の評定一致率は 90.83%であった。さらに、1 回目の評定で不一致の見られた箇所のみについて 2 度目の評定を行い、評定者 2 人の協議によってすべての被験者の方略記述における評定を完全に一致させた。方略の数については、2 度目の評定で完全に一致した評定値を帰属群ごとの合計値を得点とした。また、記述全体に含まれる方略の野実行可能性については、評定の一致ではなく、評定者 2 人の評定の平均値を得点とした。それらの評定結果から、各群の記述に含まれる方略の数の平均値と標準偏差を算出した。また、記述に含まれる方略の数に関して、帰属群による違いを検討するために、帰属群を独立変数、記述に含まれる方略の数を従属変数として、*t* 検定を行った。Table 11 に示す。

Table 13 次の試行の方略の数の評定平均値・標準偏差 (N=15)

	方略帰属群 (n=8)		外的要因帰属群 (n=7)		<i>t</i> 値
	Mean	SD	Mean	SD	
記述に含まれる方略の数	3.00	.93	1.57	.69	3.71 **

\*\**p* < .01

Table 13 より、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群）によって、記述に含まれる方略の数に有意差がみられ ( $t(13) = 3.58, p < .01$ )、方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも記述に含まれる方略の数が有意に多かった。

さらに、それぞれの被験者の記述内容全体に含まれる方略の実行可能性についても評定してもらった。なお、記述全体に含まれる方略の実行可能性については、「各記述を読み、その中に含まれる方略がどのくらい実行可能かを 0.全く実行できそうにない～6.実行可能の6段階で評定してください。」という教示文で評定してもらった。評定してもらった値をもとに、評定平均値と標準偏差を算出した。また、記述に含まれる方略の実行可能性に関して、帰属群による違いを検討するために、帰属群を独立変数、記述に含まれる方略の実行可能性を従属変数として、 $t$  検定を行った。結果を Table 14 に示す。

Table 14 記述に含まれる方略の実行可能性の評定平均値・標準偏差 (N=15)

	方略帰属群 (n=8)		外的要因帰属群 (n=7)		t 値
	Mean	SD	Mean	SD	
記述に含まれる方略の実行可能性	5.06	.77	4.21	.70	4.36 **

\*\* $p < .01$

Table 14 より、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群）によって、記述に含まれる方略の実行可能性に有意差がみられた ( $t(13) = 4.60, p < .01$ )、方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも記述に含まれる方略の実行可能性が有意に高かった。

また、2人の評定者による評定結果をもとに、帰属群ごとにどの方略をどのくらいの人数が記述したかを集計した。結果を Table 15 に示す。

Table 15 帰属群ごとの各方略を記述した人数 (N=15)

	次の試行の方略					
	1. 互いの情報の交換	2. 共通点の模索	3. 話せるネタを増やす	4. 臨機応変な話題の切り替え	5. 相手の話への傾聴的態度	6. 話し方の工夫
方略帰属群 (n=8)	4	3	4	3	4	6
外的要因帰属群 (n=7)	3	6	1	0	1	0

また、この Table 15 に示した各方略を記述した人数の集計に対して、Fisher の直接確率



方による検定を行った。その結果、有意傾向がみられた (*Fisher's exact test* ,  $p = 0.068$ )。

Table 15 から、方略帰属群はすべての方略について数人の被験者において記述がみられ、とくに、「話し方の工夫」方略については 8 人中 6 人が記述していた。一方、外的要因帰属群は 7 人中 6 人というほとんどの被験者が「共通点の模索」方略を記述していた。また、「話せるネタを増やす」、「臨機応変な話題の切り替え」、「相手の話への傾聴的態度」、「話し方の工夫」の 4 つの方略については、記述している被験者がほとんどいなかった。

また、記述した方略の違いによって、課題失敗後から帰属過程後の間の対人的自己効力感変化に違いがあるかについて検討するため、得点の変化の様子ごとにどの方略をどのくらいの人数が記述したかを集計した。

その結果、外的要因帰属群においては、記述した方略の種類に関係なく、課題失敗後から帰属過程後の間ですべての被験者の対人的自己効力感が上昇傾向がみられた。一方、方略帰属群には得点の変化にばらつきがみられたので、得点の変化得点の変化の様子ごとにどの方略をどのくらいの人数が記述したかを集計したものを Table 16 に示す。

Table 16 方略帰属群における得点の変化ごとの各方略を記述した人数 (N=8)

	方略を記述した人数					
	1. 互いの情報の交換	2. 共通点の模索	3. 話せるネタを増やす	4. 臨機応変な話題の切り替え	5. 相手の話への傾聴的態度	6. 話し方の工夫
上昇 (n=4)	1	1	3	1	3	4
変化なし (n=2)	1	0	1	1	1	2
下降 (n=2)	2	2	0	1	0	0

Table 16 から、方略帰属群において、課題失敗後から帰属過程後の間に対人的自己効力感が上昇傾向がみられた 4 名の被験者においては、「話し方の工夫」方略を全員が、また、「相手の話への傾聴的態度」方略、「話せるネタを増やす」方略についてはいずれも 4 人中 3 人が記述していた。また、課題失敗後から帰属過程後の間に対人的自己効力感が変化しなかった 2 名の被験者においては、2 名とも「話し方の工夫」方略を記述していたが、「共通点の模索」方略は記述していなかった。

課題失敗後から帰属過程後の間に対人的自己効力感が下降した 2 名の被験者においては、2 名とも「互いの情報の交換」方略、「共通点の模索」方略を記述しており、「話し方の工夫」方略、「話せるネタを増やす」方略、「相手の話への傾聴的態度」方略は記述していなかった。

## 【考察】

本研究では、対人場面における課題の失敗の原因を帰属させる要因によって、自己効力感の変化にどのような影響があるのかを検討することを目的とした。その方法として、方略帰属群・外的要因帰属群・統制群の3群を設け、帰属群の違いが自己効力感の変化の違いを検討する。そこで、事前・課題失敗後・帰属過程後の各時点の「対人的自己効力感尺度」・「初対面の人との会話に対する自己効力感尺度」の下位尺度得点をそれぞれ自己効力感の指標とした。

また、Weiner(1972),や Seligman(1991), 最上・亀島・宇恵 (2008) などの示唆をもとに、動機づけの指標として「初対面の人との会話に対する意欲」を測定し、帰属群の違いによる影響の違いを検討した。さらに、実験場面が会話場面であることから、他者との会話の頻度も測定し、自己効力感の変化との関係を検討した。

さらに、Clifford(1986)の示唆をもとに、方略帰属群と外的要因帰属群の各群が帰属過程後に有している方略の有効性を比較することで、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされているのかを検討した。

### 1. 帰属群の違いによる対人的自己効力感・初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の違い

#### 1-1) 対人的自己効力感の変化の違い

各帰属群の対人的自己効力感得点の比較を行うため、対人的自己効力感を従属変数とし、3×3（時期：事前・課題失敗後・帰属過程後×帰属群：方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の2要因分散分析を行った（Figure 4）。その結果、事前と課題失敗後の間で時期の主効果がみられ、事前から課題失敗後にかけて対人的自己効力感の有意な低下が確認された。このようなことから、本実験の初対面場面における会話課題の失敗は分析対象とした被験者の対人的自己効力感を低めたと言える。これは、Bandura(1977)が述べている「失敗感を感じたあとでは、同じ行動に対する遂行可能感が低減されてしまう」という知見に一致する。また、今回分析対象としなかった被験者については失敗体験後に自己効力感が低減されなかった。その理由としては、自己効力感が低減されなかった被験者においては、今回の実験における失敗体験が実験的操作であることを予測しており、そのため、失敗感を感じなかったのではないかと考えられる。そのため、実験者からの失敗のフィードバックも結果のフィードバックではなく、言語的説得として受け止めたため、被験者の自己効

力感を低減する効果がみられなかったのではないだろうか。また、課題失敗後と帰属過程後の対人的自己効力感得点を比較してみると、3群とも課題失敗後よりも帰属過程後の方が対人的自己効力感が上昇しているが、課題失敗後と帰属過程後の間に時期の主効果がみられなかった。このことから、対人的自己効力感については、課題の失敗体験で低減された自己効力感がその後の実験手続きつまり原因帰属過程によって変化に影響を受けたということは示されなかった。また、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）の主効果は見られなかった。このことから、本実験においては課題の失敗の原因を帰属させる要因によって自己効力感の変化に差があったという結果は示されなかった。よって、今回の実験の結果は、Anderson & Jennings(1980)などの示す結果とは異なるものとなった。また、時期（事前・課題失敗後・帰属過程後）と帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群・統制群）との交互作用はみられなかった。しかし、有意差はないが、各群の課題失敗後と帰属過程後の対人的自己効力感の差得点をとってみると、3群とも上昇傾向を示した。中でも、外的要因帰属群が最も上昇して方略帰属群と統制群はほぼ同程度上昇していた。このことから、課題の失敗によって低減された対人的自己効力感が何らかの要因で回復する可能性があると考えられる。帰属過程後に統制群も含めた3群とも対人的自己効力感も上昇傾向を示していることから、今回の実験において確認された対人的自己効力感の上昇は原因帰属過程によるものではなく、「課題失敗後における実験者との関わり」、「初対面の人との会話について何か記述すること」、「時間の経過により、失敗感を感じていたときよりも気分が落ち着いているのを感じる」という情動的喚起 (Bandura, 1977)」などのような3群共通の要因によるものであると考えられる。また、有意ではないが方略帰属群に課題失敗後と帰属過程後の間で対人的自己効力感の上昇が見られているという点では、中西 (2004) の結果と一致する。また、外的要因帰属群については本研究における原因帰属過程を被験者にとっての再帰属過程と考えると、Seligman(1991)の楽観的な帰属スタイルへの再帰属により、自己効力感を自覚させることができるという示唆に一致する。よって、以上の結果は、対人場面においては、失敗体験の原因を外的要因に帰属させると最も対人的自己効力感を高く認知させることができる可能性が示唆されると考えられる。

#### 1-2) 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の違い

各帰属群の初対面の人との会話に対する自己効力感得点の比較を行うため、初対面の人との会話に対する自己効力感を従属変数とし、3×3（時期：事前・課題失敗後・帰属過程

後×帰属群:方略帰属群・外的要因帰属群・統制群)の2要因分散分析を行った(Figure 5)。その結果、事前と課題失敗後の間、課題失敗後と帰属過程後の間で時期の主効果が有意であった。この結果から、本実験の初対面場面における会話課題の失敗は分析対象とした被験者の初対面の人との会話に対する自己効力感を低めたと言える。これは、Bandura(1977)が述べている「失敗感を感じたあとでは、同じ行動に対する遂行可能感が低減されてしまう」という知見に一致する。また、「初対面の人との会話に対する自己効力感」については、分析から除外した被験者も含め、自己効力感が低減されなかった被験者はいなかった。この結果は、対人的自己効力感とは異なるものとなった。また、課題失敗後と帰属過程後の間の時期の主効果については、課題失敗後よりも帰属過程後の方が有意に高かった。このことから、課題の失敗によって低減された初対面の人との会話に対する自己効力感が対人的自己効力感同様、何らかの要因で回復する可能性があると考えられる。ここで、初対面の人との会話に対する自己効力感が上昇した要因は、Bandura(1977)が、自己効力感は自然発生的に生じてくるものではなく、4つの情報源から得られる認知的情報分析から個人が知覚するものであると述べていることから、単なる時間の経過による影響ではなく、何か初対面の人との会話に対する自己効力感の情報源となったものがあると考えられる。帰属過程後に統制群を含めた群とも初対面の人との会話に対する自己効力感も上昇していることから、今回の実験において確認された初対面の人との会話に対する自己効力感の上昇は原因帰属過程によるものではなく、「実験者との関わり」、「初対面の人との会話について何か記述すること」、もしくは「時間の経過により、失敗感を感じていたときよりも気分が落ち着いているのを感じる」という情動的喚起(Bandura, 1977)などのような3群共通の要因によるものであると考えられる。また、時期(事前・課題失敗後・帰属過程後)と帰属群(方略帰属群・外的要因帰属群・統制群)との交互作用はみられなかった。しかし、対人的自己効力感同様に有意差はみられないものの、課題失敗後と帰属過程後の間の差得点を算出し比較してみると、外的要因帰属群が最も高く、次に統制群、方略帰属群については最も低いという対人的自己効力感同じ結果となった。よって、初対面の人との会話に対する自己効力感も、方略帰属群・統制群については、Anderson & Jennings(1980)の示唆とは、異なるものとなるが、中西(2004)の結果、Seligman(1991)の示唆に類似する結果が得られたと考えることができる。

### 1-3) 対人的自己効力感と初対面の人との会話に対する自己効力感の変化の違い

## 2. 各帰属群における対人的自己効力感得点・初対面の人との会話に対する自己効力感得点と普段人と話す頻度の関係

### 2-1) 各帰属群における対人的自己効力感と普段人と話す頻度の関係

方略帰属群, 外的要因帰属群, 統制群, 各時点の対人的自己効力感得点, 普段人と話す頻度の,  $3 \times 3 \times 2$  (時期: 事前・課題失敗後・帰属過程後  $\times$  帰属群: 方略帰属群・外的要因帰属群・統制群  $\times$  頻度: 高群・低群) の各下位尺度得点の比較を行った(Figure 6)。その結果, 事前と課題失敗後の間で時期の主効果が有意であった。また, 帰属群(方略帰属群・外的要因帰属群・統制群)の主効果, 頻度(高群・低群)の主効果はみられなかった。さらに, 交互作用はみられなかった。この結果から, 頻度によって, 対人的自己効力感の変化に違いはみられなかった。本研究では普段人と話す頻度が対人的自己効力感の変化に影響を及ぼすことを想定して, 普段人と話す頻度得点を測定したが, 今回の結果から考えると, 普段人と話す頻度によって, 対人的自己効力感の変化に影響はないと考えられる。

### 2-2) 各帰属群における初対面の人との会話に対する自己効力感と普段人と話す頻度の関係

方略帰属群, 外的要因帰属群, 統制群, 各時点の初対面の人との会話に対する自己効力感, 普段人と話す頻度の,  $3 \times 3 \times 2$  (時期: 事前・課題失敗後・帰属過程後  $\times$  帰属群: 方略帰属群・外的要因帰属群・統制群  $\times$  頻度: 高群・低群) の各下位尺度得点の比較を行った(Figure 7)。その結果, 事前と課題失敗後の間, 課題失敗後と帰属過程後の間で時期の主効果が有意であった。また, 交互作用はみられなかった。この結果から, 頻度によって, 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化に違いはみられなかった。本研究では普段人と話す頻度が初対面の人との会話に対する自己効力感の変化に影響を及ぼすことを想定して, 普段人と話す頻度得点を測定したが, 今回の結果から考えると, 普段人と話す頻度によって, 初対面の人との会話に対する自己効力感の変化に影響はないと考えられる。

## 3. 各帰属群における初対面の人との会話に対する意欲得点の比較

初対面の人との会話に対する意欲を従属変数とし,  $3 \times 3$  (時期: 事前・課題失敗後・帰属過程後  $\times$  帰属群: 方略帰属群・外的要因帰属群・統制群  $\times$  頻度高群・低群) の2要因分散

分析を行った (Figure 8)。その結果、時期 (事前・課題失敗後・帰属過程後) の主効果、帰属群 (方略帰属群・外的要因帰属群・統制群) はみられなかった。また、時期 (事前・課題失敗後・帰属過程後) と帰属群 (方略帰属群・外的要因帰属群・統制群) 交互作用はみられなかった。この結果から、帰属群 (方略帰属群・外的要因帰属群・統制群) の違いが初対面の人との会話に対する意欲の得点に違いはみられなかった。また、意欲の平均値の変化をみると、3群とも事前と課題失敗後の間では低下し、課題失敗後と帰属過程後の間では上昇しているが、有意な差はみられていないことから、初対面の人との会話に対する意欲は今回の実験の手続きではそれほど大きく変動しなかった。

#### 4. 方略帰属群・外的要因帰属群における次の試行の方略記述の文字数・記述内容の比較

##### 4-1) 次の試行の方略記述の文字数の比較

量的な視点から次の試行の方略記述内容を分析するために、次の試行の方略記述の文字数の帰属群による違いを検討した。その方法として、帰属群を独立変数、次の試行の方略記述の文字数を従属変数とした  $t$  検定を行った (Table 11)。その結果、帰属群 (方略帰属群・外的要因帰属群) による有意差はみられなかった。この結果から、帰属群の違いによって、次の試行の方略記述の文字数に違いはみられなかった。

##### 4-2) 次の試行の方略記述の内容の比較

質的な視点から次の試行の方略記述内容を分析するために、著者の分類によってみられた 6 パターンの方略を基準として、2 人の評定者によるどのような方略が含まれているか評定してもらった。それぞれ独立に行った 1 度目の評定一致率は 90.83%であった。この結果から、方略記述の評定基準は十分な信頼性をもった基準であるといえることができる。さらに、1 回目の評定で不一致の見られた箇所のみについて、評定者 2 人の協議による 2 度目の評定が行われ、すべての被験者の方略記述における評定が決定された。それらの評定結果をもとに、記述に含まれる方略の数に関して、帰属群による違いを検討するために、帰属群を独立変数、記述に含まれる方略の数を従属変数として、 $t$  検定を行った (Table 13)。その結果、帰属群 (方略帰属群・外的要因帰属群) によって、記述に含まれる方略の数に有意差がみられ、方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも記述に含まれる方略の数が有意に多かった。この結果は、Clifford(1986)による失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆から考えると、妥当な結果であると考えられる。つまり、

失敗の方略帰属をしている方略帰属群は実験時、失敗体験の原因を考えている5分間からすでに「今のやり方では失敗につながったから次はこんなやり方でやろう」という次の行動で用いるより効果的な方略の探求がされ始めていると考えられる。方略帰属群は原因帰属過程で失敗の原因は方略によるものであると考えているため、すでに課題失敗時の方略のどのような点が問題であったのかということ把握しており、方略修正のための多くの情報を持っている。情報をもとに多くの方略を記述することができたと考えられる。一方、外的要因帰属群は失敗が外的な要因によるものであると考えているため、「⑦次の方略を考える」の過程では、失敗した原因外的な要因をもとに、次の試行の方略を考えている。そのため、次の試行の方略を考えるときに持っている情報が少なく、また、外的要因をもとに考えた方略しか記述できないために、方略帰属群に比べて、少数の方略しか記述できなかったのだと考えられる。

さらに、それぞれの被験者の記述内容全体に含まれる方略の実行可能性についても評定してもらった。評定してもらった値をもとに、評定平均値と標準偏差を算出した。また、記述に含まれる方略の実行可能性に関して、帰属群による違いを検討するために、帰属群を独立変数、記述に含まれる方略の実行可能性を従属変数として、t検定を行った（Table 14）。その結果、帰属群（方略帰属群・外的要因帰属群）によって、記述に含まれる方略の実行可能性に有意差がみられ、方略帰属群の方が外的要因帰属群よりも、有意に記述に含まれる方略の実行可能性が高かった。この結果についても、方略の数と同じく、Clifford(1986)に示唆から考えると、妥当な結果であると考えられる。また、方略の実行可能性についても、方略の数と同様に、方略帰属群は原因帰属過程で得た方略修正のための多くの情報ををもとに方略記述全体の実行可能性を高めることができたと考えられる。一方、外的要因帰属群情報が少なく、また、外的要因をもとに考えた方略しか記述できないために、方略帰属群に比べて、実行可能性の低い方略記述なってしまったのだと考えられる。

さらに、この結果から、Clifford(1986)による失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆に加えて、実行可能性についても高まるよう方略の探求がなされている可能性が示唆されたと言えるのではないだろうか。

このように、方略記述の内容については、含まれる方略の数も、記述に含まれる方略の実行可能性も方略帰属群の方が有意に高いということが示された。方略と自己効力感の関係について、伊藤（1996）が方略の保有感の高低によって自己効力感の大きさが決まると

いうことを示唆していることに加え、適切な方略と自己効力感の正の関係を示す研究が多いこと（伊藤，1996；最上・亀島・宇恵，2008；小野・鈴木・平，2009 など）から、これらの方略がより明確に知覚されれば、自己効力感にポジティブな影響を与えることが考えられる。また、効果的で実行可能性の高い方略を多くもつ方略帰属群の被験者はこれらの方略を使用することで、次の初対面の会話場面でより高い確率で成功体験をすることが予想される。よって、今回記述された方略の使用による成功体験によって自己効力感が高められるという可能性を示唆する結果と言えるのではないだろうか。

また、各方略を記述した人数の集計（Table 15）からは、方略帰属群はすべての方略について数人の被験者において記述がみられ、とくに、「話し方の工夫」方略については8人中6人が記述していた。この結果は、課題失敗時の方略をもとに、次の試行を考えるため、多様な方略が考えだし、記述することができるのだと考えられる。一方、外的要因帰属群は7人中6人というほとんどの被験者が「共通点の模索」方略を記述していた。また、「話せるネタを増やす」、「臨機応変な話題の切り替え」、「相手の話への傾聴的態度」、「話し方の工夫」の4つの方略については、記述している被験者がほとんどいなかった。この結果は予備調査において、大学生が友人との会話が盛り上がらない時の原因をとして、「共通の話題がない、興味・関心が合わない」というカテゴリを最も多く回答していたことを考えると、妥当な結果といえるだろう。よって、この結果から、失敗の帰属後において、方略帰属群は「話し方の工夫」方略を中心に、幅広く様々な方略を有しており、外的帰属群は「共通点の模索」方略と「互いの情報交換」など外的要因から考えられる限られた方略しか有していないことが示された。

また、記述した方略の違いによって、課題失敗後から帰属過程後の間の対人的自己効力感変化に違いがあるかどうかについても検討した。その結果、方略帰属群において、課題失敗後から帰属過程後の間に対人的自己効力感が上昇した4名の被験者においては、「話し方の工夫」方略を全員が記述していた（Table 16）。また、「相手の話への傾聴的態度」方略、「話せるネタを増やす」方略については4人中3人が記述していた。このことから、「話し方の工夫」、「相手の話への傾聴的態度」、「話せるネタを増やす」の3つの方略が対人的自己効力感にポジティブな影響を与える可能性があると考えられる。また、外的要因帰属群においては、記述した方略に関係なく、すべての被験者で対人的自己効力感が上昇していた。このことから、外的要因帰属することは、方略の種類に関わらず、対人的自己効力感にポジティブな影響を与える可能性があると考えられる。



これらの結果から、方略帰属群と外的要因帰属群の次の試行の方略記述には、量的な側面では大きな差はないが、質的な側面が大きく異なっていることが明らかになった。さらに、その質的な側面では、外的要因帰属群よりも方略帰属群の方が有する方略が優れており、その方略が自己効力感にポジティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。

## 【総合考察】

本研究では対人場面における失敗の原因帰属のさせ方の違いによって、自己効力感の変化にどのような影響を及ぼすのかを検討することを目的とした。その方法として、被験者を方略帰属群・外的要因帰属群・統制群に分けて、その帰属群の違いによって、対人的自己効力感得点、初対面の人との会話に対する自己効力感に違いが出るかを実験により、検討した。また、自己効力感や原因帰属と関連のある要因として、意欲も測定し、帰属群によってその変化に違いがあるかどうかにも検討した。実験においては、初対面の人との会話場面を設定した。そのため、実験場面をふまえると被験者が普段人と話す頻度についても自己効力感に影響を及ぼすと考えられ、被験者が普段人話す頻度についても測定し、自己効力感の変化との関連を検討した。さらに、Clifford(1986)において、失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆されていることから、方略帰属群と外的要因帰属群が原因帰属後に有している方略の有効性についても比較検討した。その方法としては、原因帰属後に次に初対面の人と話す場面において用いる方略を記述させ、その記述内容を分析し、2群を比較検討した。

原因帰属のさせ方と自己効力感の変化については、対人的自己効力感においても、初対面の人との会話に対する自己効力感においても、帰属群の違いによって自己効力感の変化に有意な差はみられなかった。このことから、今回の原因帰属過程の手続きでは、被験者の対人的自己効力感、初対面の人との会話に対する自己効力感に有意な変化をもたらすことには至らなかったと考えられる。原因帰属のさせ方について、速水(1990)は、帰属的フィードバックが原因帰属を外から押しつける不自然さを指摘しており、自ら気付かせていくように原因帰属を変化させていくほうが無理がないと述べている。このことから、本研究における原因帰属過程の手続きは、実験者側から指定した要因について原因を考えてもらうという形式をとっており、被験者自身に考えさせてはいるが、被験者が自ら気付くような過程であったとはいえない。そのため、原因帰属過程の自己効力感に対する影響力が低く、帰属群ごとに自己効力感の変化に違いがみられなかったのではないかと考えられる。そのため、原因帰属のさせ方の違いが自己効力感の変化に及ぼす影響については、帰属過程の手続きを再考して、検討し直す必要があるだろう。

また、原因帰属のさせ方と自己効力感の変化と普段人と話す頻度の関係については、対人的自己効力感においても、初対面の人との会話に対する自己効力感においても、普段人と話す頻度の違いによって自己効力感の変化に有意な差はみられなかった。よって、普段

人と話す頻度は今回の実験場面における自己効力感の変化にはそれほど大きな影響力を持っていなかったと考えられる。

さらに、原因帰属のさせ方と意欲の変化 帰属群の違いによって、初対面の人との会話に対する意欲の変化に有意な差はみられなかった。また、時期によっても初対面の人との会話に対する意欲の得点に有意な差がみられなかったことから、今回の実験における失敗体験、原因帰属過程は初対面の人との会話に対する意欲に対しては、それほど大きな影響力を持っていなかったことが考えられる。

そして、次の試行の方略記述に関しては、まず、量的な視点から各群の記述を分析するため、記述の文字数について検討したが、帰属群の違いによって有意な差はみられなかった。

次に、質的な視点から各群の記述を分析するため、著者の分類によって見いだされた 6 パターンの方略を基準として、2 人の評定者によるどのような方略が含まれているか・さらに、それぞれの被験者の記述内容全体に含まれる方略の実行可能性について評定してもらった。それらの評定結果をもとに検討したところ、外的要因帰属群よりも方略帰属群の方が記述に含まれる方略の数が有意に多く、記述に含まれる方略の実行可能性が有意に高かった。これらの結果は、本研究の実験中の原因帰属過程において、Clifford(1986)の示唆する失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされたためであると考えられる。さらに、この結果から、Clifford(1986)による失敗の方略帰属の後に、より効果的な方略の探求がなされる可能性の示唆に加えて、実行可能性についても高まるよう方略の探求がなされている可能性が示唆されたと言えるのではないだろうか。さらに、方略と自己効力感の正の関係を示す研究（伊藤，1996；最上・亀島・宇恵，2008；小野・鈴木・平，2009 など）から、これらの方略がより明確に知覚されれば、自己効力感にポジティブな影響を与えることが考えられる。また、効果的で実行可能性の高い方略を多くもつ方略帰属群の被験者はこれらの方略を使用し、次の初対面の会話場面で成功体験をすることによっても、自己効力感が高められるという可能性を示唆された。また、各方略を記述した人数の集計からは、方略帰属群は「話し方の工夫」方略を中心に、幅広く様々な方略を有しており、外的帰属群は「共通点の模索」方略と「互いの情報交換」など外的要因から考えられる限られた方略しか有していないことが示された。

さらに、方略帰属群において、「話し方の工夫」、「相手の話への傾聴的態度」、「話せるネタを増やす」の 3 つの方略が対人的自己効力感にポジティブな影響を与える可能性がある

と考えられる。

これらの結果から、方略帰属群と外的要因帰属群の次の試行の方略記述には、量的な側面では大きな差はないが、質的な側面において、外的要因帰属群よりも方略帰属群の方が有する方略が優れており、その方略が自己効力感にポジティブな影響を及ぼす可能性が示唆された。

これらのことを総合して考えると、方略帰属群においては原因帰属による自己効力感への影響はみられず、課題失敗後から帰属過程後の間の自己効力感の上昇傾向が外的要因帰属群に比べて小さく、統制群と同程度であることが示唆された。一方、帰属後に有する次の試行の方略については、外的要因帰属群よりも、数が多く、実行可能性が高いということが見いだされた。さらに、「話し方の工夫」、「相手の話への傾聴的態度」、「話せるネタを増やす」の3つの方略が対人的自己効力感にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。この点について、伊藤（1996）などの効果的な方略は自己効力感にポジティブな影響を及ぼすということを示す研究（2009；小野・鈴木・平，2009；最上・亀島・宇恵，2008など）をもとに考えると、方略帰属群においては、これらの効果的な方略を有していることによって、自己効力感にポジティブな影響を及ぼすことが考えられる。また、方略帰属群のように、効果的な方略を有していることによって次の行動での成功体験を期待される。よって、方略帰属群においては、帰属後に有している方略を使用して成功体験をすることなどが二次的に自己効力感を上昇させる可能性があると考えられる。これらのことから、方略帰属群においては、失敗の原因帰属直後には、外的要因帰属群よりも自己効力感を低く認知すると考えられる。しかし、効果的な方略を有していること自体や、その方略を使用することによる次の行動での成功体験によって、二次的に自己効力感を高めることができる可能性が示唆された。

また、外的要因帰属群では方略帰属群と同じく原因帰属による自己効力感への影響はみられなかったが、課題失敗後から帰属過程後の間の自己効力感の上昇傾向が方略帰属群・統制群よりも大きいということが示唆された。さらに、帰属後に有する次の試行の方略については、方略帰属群に比べて、数が少なく、実行可能性も低いということが見いだされた。しかし、外的要因帰属群は課題失敗後と帰属過程後の間で記述した方略の種類に関係なく、対人的自己効力感に上昇傾向がみられた。これらのことから、外的要因帰属群においては、失敗の原因帰属直後には、方略帰属群よりも自己効力感を高く認知し、有する方略の種類に関わらず自己効力感が上昇すると考えられる。しかし、次の行動に対して効果

的な方略をそれほど多く有していないため、方略の実行可能性が低いため、方略が自己効力感に二次的に及ぼすにポジティブな影響については期待できないと考えられる。

以上のことから、本研究の結論としては、帰属直後の短期的な視点で見ると、外的要因に帰属させて、自己効力感の上昇傾向を高めることが望ましいと考えられるが、次の行動までを考える長期的な視点でみるならば、方略帰属させることによって効果的な方略を考えさせ、効果的な方略を有していることやその方略の使用による成功などによって二次的に自己効力感を高めることが望ましいと考えられる。

このような本研究における示唆は、カウンセリング場面などにおいて、対人恐怖心性などの症状に悩む青年に対し、症状を抑えることが急務な場合には、外的要因に帰属させて、自己効力感の上昇傾向を高め、対人恐怖心性自体を治療する場合には、方略帰属させることによって効果的な方略を考えさせ、効果的な方略を有していることやその方略の使用による成功などによって二次的に自己効力感を高めるなどのような形で生かすことができるものであると考えられる。

## 【今後の課題】

本研究では第 1 の目的として、対人場面における失敗の原因帰属のさせ方の違いによって、自己効力感の変化にどのような影響を及ぼすのかを検討した。しかし、対人的自己効力感においても、初対面の人との会話に対する自己効力感においても、帰属群の違いによって自己効力感の変化に有意な差はみられなかった。このような原因帰属のさせ方について、速水（1990）は、帰属的フィードバックが原因帰属を外から押しつける不自然さを指摘しており、自ら気付かせていくように原因帰属を変化させていくほうが無理がないと述べていることから、本研究における原因帰属過程の手続きは被験者が自ら気付くような形で行われていなかったということが考えられる。中西（2004）はこの速水（1990）の指摘をもとに、面接によって原因帰属を変容させていくという手続きをとっている。よって、原因帰属過程の手続きとしては、中西（2004）のように、被験者に自ら気付かせるような形で原因帰属をさせるような手続きを用いて再考する必要があると考えられる。また、原因帰属過程では介入という手段をとらず、被験者自身の帰属の仕方に任せて帰属をさせ、帰属因の違いによる自己効力感の影響の違いを検討することも、被験者に無理なく原因帰属ができる方法として有効であると考えられる。

また、原因帰属のさせ方だけでなく、帰属因についても、さらなる検討の必要性を感じる。今回は帰属群として設定した方略帰属群と外的要因帰属群だけでなく、他の帰属因に帰属させたときには自己効力感にどのような影響を与えるのかを検討する必要があるだろう。まず、玄（1993）も取り上げている「努力」については、帰属因として扱い、検討する必要がある。本研究で取り上げた「方略」は努力の方向的側面ともいわれ、努力との弁別性が問題になる。そのため、「方略」、「努力」を帰属因とした実験デザインで自己効力感への影響の違いを検討する必要があるだろう。また、今回設けた外的要因帰属群は Weiner（1972, 1979）のモデルに当てはめてみると、複数の領域にまたがっている帰属因であることがわかる。このことから、外的要因帰属群に帰属している被験者の中でも、外的要因の中のどのような内容の要因に帰属しているかで自己効力感に与える影響が違ってくることが考えられる。そのため、これまでの先行研究などをもとに、範囲の広すぎない帰属因を設定することが必要であると考えられる。

また、本研究における実験では初対面の人との会話場面における盛り上げ課題の失敗によって、被験者の自己効力感が低下することを想定していた。しかし、7人の被験者が課題失敗後に自己効力感が上昇するという結果となった。そのため、その7人は分析から除外

し、分析対象となる被験者が 23 人と少なくなってしまった。よって会話課題においても、実験者が課題の失敗を告げると、被験者の多くが失敗感を感じるような課題内容を再考する必要があると考えられる。

さらに、「⑦次の方略を考える」の過程で記述された方略は記述した被験者が実際に使用できるかどうかは確認されていない。とくに、方略帰属群では、効果的で実行可能性の高い方略を有していること、「話し方の工夫」・「相手の話への傾聴的態度」・「話のネタを増やす」の 3 つの方略が自己効力感へのポジティブな影響を及ぼす可能性が示唆されたが、有している方略が本当に効果的かどうか、本当に実行可能性が高いものかどうか、上述の方略が本当に自己効力感にポジティブな影響を及ぼすのか本研究の手続きでは確認ができなかった。そのため、記述させるだけでなく、記述した方略を用いてもう一度実験協力者と会話してもらうなどの被験者の実際の方略使用を確認・検証する手続きが必要であると考えられる。さらに、最後に成功過程を設けることで、実験終了時に被験者の自己効力感を高めることができるため、被験者の心理的負担の点からも有意義な手続きであると考えられる。また、本研究では方略帰属群において、「話し方の工夫」、「相手の話への傾聴的態度」、「話せるネタを増やす」の 3 種類の方略が対人的自己効力感にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。「⑦次の方略を考える」の過程でそのような方略を記述できなかった被験者もみられた。本研究では、そのような被験者がなぜ方略に帰属したにも関わらず、上述のような方略を記述することができなかったのか、また、そのような被験者はどうすれば対人的自己効力感を高めることができるのかについては有用な示唆は得られなかった。よってその点についてもさらなる検討の必要性があると考えられる。

そして、本研究における実験は、全行程が完了するまでに 40 分程度もの時間を要した。この所要時間では、被験者に対する負担が大きいことが考えられ、実際に実験の終盤になると、集中力が切れてしまっている被験者もみられた。その結果、実験への取り組みが雑になってしまったり、質問紙への回答にゆがみが生じてしまったりする可能性も考えられる。このようなことを考えると、実験手続きを見直し、無駄な手続きを省くことで、実験の所要時間の短縮をはかる必要があるだろう。

## 【引用文献】

- Abramson, L. Y., Seligman, M. E. P., & Teasdale, J. D. 1978 Learned helplessness in humans: Critique and reformulation. *Journal of Abnormal Psychology*, **87**, 49-74.
- Anderson, C. A., & Jennings, D. L. 1980 When expectancies of failure promote expectations of success: The impact of attributing failure to ineffective strategies. *Journal of Personality*, **48**, 393-407.
- Atkinson, J. W. 1964 *An introduction to motivation*. Princeton, New Jersey: Van Nostrand.
- Atkinson, J. W., & Feather, N. T. 1966 *A theory of achievement motivation*. New York: Wiley.
- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, **84**, 191-215.
- Bandura, A. 1985 社会的学習理論の新展開 祐宗省三・原野光太郎・柏木恵子・春木豊 (編) 金子書房
- Clifford, M. M. 1986 The comparative effects of strategy and effort attributions. *British Journal of Educational Psychology*, **56**, 75-83.
- Findley, M. J., & Cooper, H. M. 1983 Locus of control and academic achievement: A literature review. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 419-427.
- 玄 正 1993 努力帰属的評価が児童のエフィカシー予期の認知と学業達成に及ぼす効果 教育心理学研究, **41**, 221-229.
- 速水敏彦 1990 教室場面における達成動機づけの原因帰属理論 風間書房
- 後藤学・大坊郁夫 2003 大学生はどんな対人場면을苦手とし、得意とするのか?—コミュニケーション場面における自由記述と社会的スキルの関連— 対人社会心理学研究, 堀井俊章 2002 青年期における対人不安意識の発達的变化(続報) 山形大学紀要 第13巻 第1号
- 伊藤崇達 1996 学業達成場面における自己効力感, 原因帰属, 学習方略の関係 教育心理学研究, **44**, 340-349.
- 小久保みどり 1998 大学生の職業選択・キャリア開発へのモチベーションとキャリア志向 立命館経営学 **37**(3), 1-20.
- 小久保みどり 2000 若者の職業選択・キャリア開発へのモチベーション 立命館大学



- 楠奥繁則 2006 自己効力理論からみた大学生のインターンシップの効果に関する実践研究—ベンチャー企業へのインターンシップを対象にした調査— 立命館経営学 44, 5, 169-185.
- 前田基成 1991 児童の恐怖症の心理治療におけるセルフ・エフィカシーと行動変容に関する検討 教育相談研究, 29, 31-35.
- 前田基成・坂野雄二・東條光彦 1987 系統的脱感作法による視線恐怖反応の消去に及ぼす SELF-EFFICACY の役割 行動療法研究, 12, 158-170.
- 松尾直博・新井邦二郎 1998 児童の対人不安傾向と公的自意識, 対人的自己効力感との関係 教育心理学研究, 46, 21-30.
- 松島るみ・塩見邦雄 2002 対人的自己効力感尺度の検討 教育心理学研究発表論文集
- 松島るみ・塩見邦雄 2002 対人的自己効力感と学校における対人ストレスの関係について 教育心理学研究発表論文集
- 松島るみ・塩見邦雄 2003 対人的自己効力感とストレス対処方略が対人ストレスに及ぼす影響について 教育心理学研究発表論文集
- 最上多美子・亀島信也・宇恵弘 2008 大学適応感、学習動機、学習方略の関係 教育心理学研究発表論文集
- 永井徹 1994 対人恐怖の心理：対人関係の悩みの分析 サイエンス社
- 中西良文 2004 成功／失敗の方略帰属が自己効力感に与える影響 教育心理学研究, 52, 127-138.
- 小田美穂子・嶋田洋徳・森治子・三浦正江・坂野雄二・猿渡末治 1994 高校生の数学のテスト不安における認知的変数の影響(2)—セルフ・エフィカシーを中心として— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 333.
- 岡浩一朗 2003 中年者における運動行動の変容段階と運動セルフ・エフィカシーの関係. 日本公衆衛生雑誌, 50, 208-215.
- 小野耕一・鈴木孝昌・平真木夫 2009 中学1年生の学習適応に関する調査研究—学習方略の不使用と自己効力感の変化に着目して— 教育心理学研究発表論文集
- Rotter, J. B. 1966 Generalized expectancy for internal vs. external control of reinforcement. *Psychological Monographs*, 80, 1-28.
- 坂野雄二・前田基成 2002 セルフ・エフィカシーの臨床心理学
- 坂野雄二 1988 テスト不安の継続的变化に関する研究 早稲田大学人間科学研究, 1,

31-44.

- 桜井茂男 1987 自己効力感が学業達成に及ぼす影響 教育心理, 35, 56-61.
- Schunk, D. H. 1995 Self-efficacy and cognitive skill learning. In J . E . Maddux(ed.),  
Self-efficacy, adaptation, and adjustment : Theory , research , and application . *New York :  
Plenum Press.*
- Seligman,M.E.P. 1991 Learned Optimism. *New York:A.A. Knopf.*
- Seiffge-Krenke, Inge 1995 Stress, Coping, and Relationships in Adolescence. *Lawrence Erlbaum  
Associates, Publishera.*
- 嶋田洋徳 1996 中学生におけるセルフ・エフィカシーの心理ストレス軽減効果 ヒュー  
マンサイエンスリサーチ, 5, 55-68.
- 塩見邦雄・駒井良樹 1994 「理科学習」におよぼす自己効力感と理科不安について 教  
育心理学研究発表論文集
- Taylor, K.M. & Betz, N.E. 1983 Applications of self-efficacy theory to the understanding and  
treatment of career indecision , *Journal of Vocational Behavior* , 22,63-81.
- 富安浩樹 1997 大学生における進路自己効力と進路決定行動の関連 発達心理学研究, 8,  
1, 15-25.
- 浦上昌則 1995 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀  
要 (教育心理編) 42, 115-126.
- Weiner, B. 1972 Theories of motivation. *Chicago:Rand McNally.*
- Weiner, B. 1979 A theory of motivation for some classroom experiences. *Journal of Educational  
Psychology*, 71,3-25.
- 山田恭子・堀 匡・國田, 祥子・ 中條和光 2010 大学生の学習方略使用と達成動機, 自己  
効力感の関係 広島大学心理学研究 9, 37-51.

## 【謝辞】

私が本当に多くの方に支えていただき、本論文を書き上げることができました。特に、指導教官である中西良文先生には、研究の構想から実験の計画、分析、本文作成に至るまできめ細かな指導をしていただき、心より感謝申し上げます。本論文提出までご心配をおかけしてばかりでしたが、根気強くご指導いただき、中西先生の温かさに常に支えていただきました。また、本論文に限らず、進路の相談にも乗っていただいたことや、普段の中西先生との楽しい雑談の時間も私の学生生活の支えでした。中西先生には本当にどれだけ感謝してもし尽くせません。本当にありがとうございました。

また、学校教育講座の先生方には、卒業中間発表会を通じて、本研究についてあたたかい助言をいただきました。中でも、教育心理学講座の松浦均先生、南学先生、赤木和重先生には教育心理学教室の卒論中間発表会などにおいても本研究に対し、多くの具体的なアドバイスや研究を深めるための視点を提供していただきました。本当にありがとうございました。さらに、心理学図書室や実験室の使用等に関わって、お世話になった事務職員の園田喜子さんにも深く感謝申し上げます。

また、急なお願いにもかかわらず、貴重な授業の時間に被験者の募集用紙や予備調査の質問紙を配布することを快く引き受けてくださった、松浦均先生、廣岡雅子先生、赤木和重先生にこの場を借りて御礼申し上げます。

さらに、予備調査や実験に協力していただいた学生の皆さん、本当にありがとうございました。実験に参加してくださった学生のみなさんには貴重な時間割いて実験に参加していただき大変感謝しています。

そして、中西ゼミの石井僚さん、加藤侑さん、西村まりなさんには構想の段階からたくさんの意見をいただき、さらに、実験協力者も快く引き受けていただき、本論文の執筆に当たり、本当にたくさんの支援をしていただきました。心より感謝申し上げます。さらに、中西ゼミ卒業生の梅本貴豊さん・田中健史朗さんには、昨年度からの本研究の構想へのたくさんのアドバイスや本文の添削などに加え、進路の相談などにも乗っていただき、大きな心の支えとなっていただきました。心より感謝申し上げます。また、自分自身も卒論の執筆中にもかかわらず、実験協力者を快く引き受けてくださった渥美朋子さん、市川大貴さんに心より感謝申し上げます。市川さんには被験者の募集にもご協力いただき、本当にお世話になりました。さらに、忙しい中方略の評定を快く引き受けてくれた國廣明来さん、早野和美さんに心より感謝申し上げます。そして、学校教育講座 59 期の皆さんとは、ともに励まし

合い、助け合うことで、卒業論文という大きな課題と向き合うことができました。本当にありがとうございました。

この卒業論文を作成するにあたってご協力いただきました全ての皆さんに、心から厚く御礼申し上げます。

平成 23 年 1 月 20 日

## 【資料】

### 1. 予備調査質問紙

# 大学生の会話についての調査

この調査は、大学生会話に関して質問させていただくものです。みなさんの回答結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

回答は人によって異なるのが普通ですから、正しい解答や間違った回答というものはありません。深く考えすぎず、ありのままをお答えください。

お手数をおかけしますが、ご協力よろしくお願いいたします。

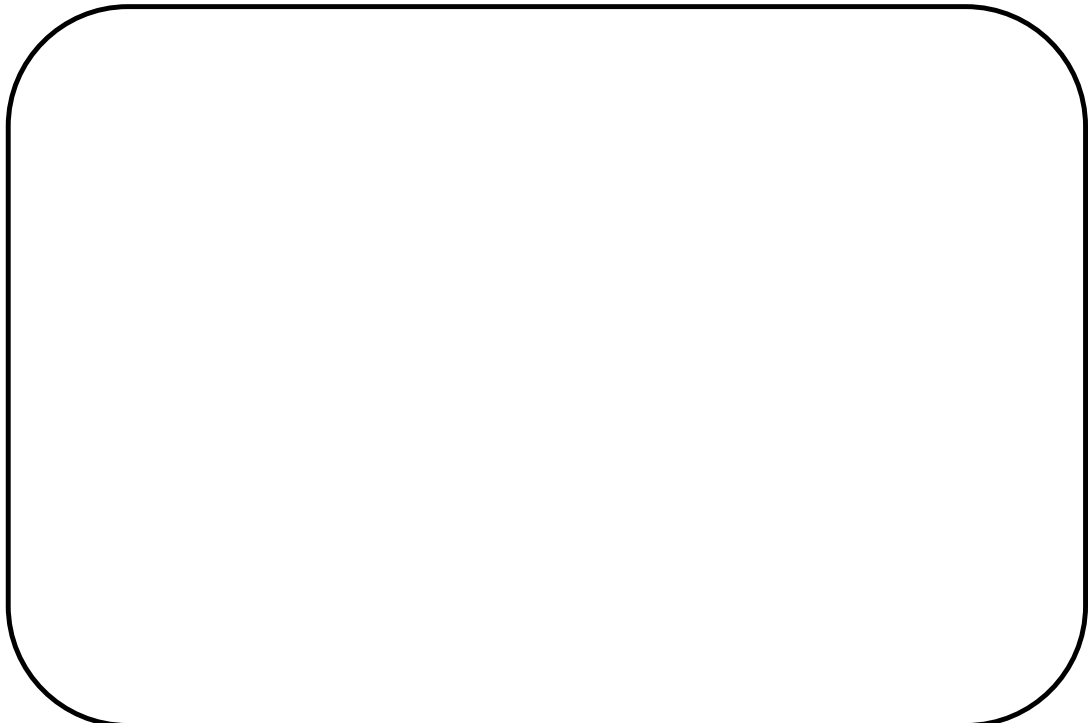
なお、この調査に関して疑問点や問題点がございましたら、下記までご連絡下さい。

三重大学 教育学部 人間発達科学課程 4年 中西研究室所属 松谷 健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

性別( 男 ・ 女 ) 年齢( )歳  
学部( ) 学年(1年・2年・3年・4年以上・院生)

○あなたと友人との話が盛り上がらないとき、その原因はどこにあると考えますか。あなたの考える原因を下の記入欄にお答えください。



ご記入ありがとうございました。

よろしければ、裏面の実験についてもご協力お願いいたします。

## 2. 被験者募集用紙

# 研究協力をお願い

教育学部人間発達科学課程人間発達科学コース4年の松谷健二と申します。

質問紙へのご回答ありがとうございました。先ほど説明させていただいたとおり、私は現在、卒論で『大学生の会話』に関する研究を行っています。この研究するにあたり、みなさんに実験に協力していただきたく、お願いに参りました。

実験の概要は初対面の人とお題の話題について盛り上がるような話をしてもらい、質問紙にこたえていただくというものです。調査にかかる時間は、個人差はありますが30分程度です。

ご協力いただける方は、下にお名前と連絡先(学生アドレス or 携帯メールアドレス)のご記入をお願いいたします。こちらからそのアドレスに連絡をさせていただき、調査日などの相談をさせていただきます。アドレスは、調査の日程・時間の相談などに使用し、他のことには一切使用いたしません。また、研究後には、責任をもってすべて削除いたします。

何卒よろしく願いいたします。

お名前 \_\_\_\_\_

学部・学科 \_\_\_\_\_

学年 \_\_\_\_\_

連絡先(学生アドレス or 携帯メールアドレス) \_\_\_\_\_

教育学部 人間発達科学課程人間発達科学コース

中西研究室所属 松谷健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

### 3. 実験同意書

## 実験同意書

本日の実験は、大学生の会話に関する研究にかかわる実験です。実験では、一定時間見知らぬ方と会話をしていただき、さらにいくつかの質問紙に解答していただくというものです。

途中で、実験参加をとりやめたい場合は、いつでもとりやめられます。その際には、実験者に気軽に声をかけてください。

実験時には、分析のため実験の様子をビデオ撮影させていただきます。撮影した映像については、あなたのプライバシーが侵害されないよう最大限の注意を払い、研究に関わるもの以外に触れられることはありません。そのため、撮影された映像そのものは公表しませんが、研究発表に用いられる可能性があります。ただし、この映像が研究発表などに用いられる場合には顔を隠し、音声を変えるなどして、処理・分析された映像を使用し、個人が特定されないように配慮いたします。

また、実験中にご回答いただく質問紙のデータについても、結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

これらの点をご理解いただいた上で、実験にご協力いただけるようでしたら、以下に自筆で記入をお願いします。

年 月 日

氏名 \_\_\_\_\_

### 3. 事前質問紙

## 大学生の会話についての調査

この調査は、大学生がどのような話題で盛り上がるのかに関して質問させていただくものです。みなさんの回答結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

回答は人によって異なるのが普通ですから、正しい解答や間違った回答というものはありません。深く考えすぎず、ありのままをお答えください。

お手数をおかけしますが、ご協力よろしくお願いします。

記入欄がある箇所については、このアンケート用紙に直接記入してください。

選択肢のある質問については、当てはまる番号を選び○をつけてください。

なお、この調査に関して疑問点や問題点がございましたら、下記までご連絡下さい。

2010年11月

三重大学 教育学部 人間発達科学課程 4年

中西研究室所属 松谷 健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

性別(男・女) 年齢( )歳

学部( )

学年(1年・2年・3年・4年以上・院生)

※表紙含め6ページあります。ご確認お願いいたします。



1. それぞれの質問について、あなたに当てはまるところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
例) 私の話は相手にとっても面白いと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
1. 盛り上がる話が好きだ・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
2. 話は盛り上がりが大切だと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
3. 話が盛り上がるのにはいくつかの要素が必要だと思う・・・・・・・・	1	2	3	4	5
4. 友人に関する話で盛り上がる話のネタをいくつも持っている・・・・・・・・	1	2	3	4	5
5. 友人に関する話以外でも盛り上がる話のネタを持っている・・・・・・・・	1	2	3	4	5
6. 相手とうまく話のやりとりができる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
7. 私は誰とでも気軽に話せる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
8. 私は友人と話を合わせるのがうまいと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
9. 私は人にうまくアドバイスできる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
10. 初めてあう人にでもうまく自己紹介ができる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
11. 私は誰とでも仲良くできると思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
12. 私はたとえけんかしてもすぐに仲直りできると思う・・・・・・・・	1	2	3	4	5
13. 私は友人に嫌なことを頼まれても、断ることができる・・・・・・・・	1	2	3	4	5

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
14. 私は何でもやればできると思う	1	2	3	4	5
15. 私は自分で自分をほめることができる	1	2	3	4	5
16. 私は人にしてほしいことをきちんと説明できる	1	2	3	4	5
17. 私は話が豊富であると思う	1	2	3	4	5
18. 私は今自分に満足している	1	2	3	4	5
19. 私は同級生だけでなく、先輩後輩ともうまくやることができる	1	2	3	4	5

2. あなたの初対面の人と会話することに対する意欲はどのくらいですか？現在のあなたに当てはまるところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

全く話したいと思わない	どちらとも言えない	とても話してみたいと思う
0	5	10
1		
2		
3		
4		
6		
7		
8		
9		

3. あなた普段友人とどのくらい話しますか？あなたに当てはまると思うところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

全く話さない

どちらとも言えない

よく話す

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

4. あなたは初対面の人とどのくらい上手く会話できると思いますか？最大を100%として、現在のあなたは何%くらいか下の記入欄にお答えください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

以上で終了です。ご記入ありがとうございました。

恐れ入りますが、記入漏れがないかもう一度ご確認をお願いします。

#### 4. 盛り上がり評定用紙

## 大学生の会話についての調査

この調査は、大学生がどのような話題で盛り上がるのかに関して質問させていただくものです。みなさんの回答結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

回答は人によって異なるのが普通ですから、正しい解答や間違った回答というものはありません。深く考えすぎず、ありのままをお答えください。

お手数をおかけしますが、ご協力よろしくお願いします。

記入欄がある箇所については、このアンケート用紙に直接記入してください。

選択肢のある質問については、当てはまる番号を選び○をつけてください。

なお、この調査に関して疑問点や問題点がございましたら、下記までご連絡下さい。

2010年11月

三重大学 教育学部 人間発達科学課程 4年

中西研究室所属 松谷 健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

性別(男・女) 年齢( )歳

学部( )

学年(1年・2年・3年・4年以上・院生)

※表紙含め2ページあります。ご確認お願いいたします。

1. それぞれの質問について、あなたに当てはまると思うところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
例) 私の話は相手にとっても面白いと思う・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
1. 今回、相手との話は盛り上がった・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
2. 今回、相手の話を引き出すことができた・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
3. 今回の相手とまた話をしたい・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
4. 私は友人に関する話で盛り上がる話のネタをいくつも持っている・・	1	2	3	4	5
5. 私は友人に関する話以外でも盛り上がる話のネタを持っている・・	1	2	3	4	5

以上で終了です。ご記入ありがとうございました。

恐れ入りますが、記入漏れがないかもう一度ご確認をお願いします。

## 5. 課題失敗後質問紙

### 大学生の会話についての調査

この調査は、大学生がどのような話題で盛り上がるのかに関して質問させていただくものです。みなさんの回答結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

回答は人によって異なるのが普通ですから、正しい解答や間違った回答というものはありません。深く考えすぎず、ありのままをお答えください。

お手数をおかけしますが、ご協力よろしくお願いします。

記入欄がある箇所については、このアンケート用紙に直接記入してください。

選択肢のある質問については、当てはまる番号を選び○をつけてください。

なお、この調査に関して疑問点や問題点がございましたら、下記までご連絡下さい。

2010年11月

三重大学 教育学部 人間発達科学課程 4年

中西研究室所属 松谷 健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

性別(男・女) 年齢( )歳

学部( )

学年(1年・2年・3年・4年以上・院生)

※表紙含め3ページあります。ご確認お願いいたします。

1. それぞれの質問について、あなたに当てはまると思うところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
例) 私の話は相手にとっても面白いと思う . . . . .	1	2	3	4	5
1. 相手とうまく話のやりとりができる . . . . .	1	2	3	4	5
2. 私は誰とでも気軽に話せる . . . . .	1	2	3	4	5
3. 私は人にしてほしいことをきちんと説明できる . . . . .	1	2	3	4	5
4. 私は人にうまくアドバイスできる . . . . .	1	2	3	4	5
5. 初めてあう人にでもうまく自己紹介ができる . . . . .	1	2	3	4	5
6. 私は誰とでも仲良くできると思う . . . . .	1	2	3	4	5
7. 私はたとえけんかしてもすぐに仲直りできると思う . . . . .	1	2	3	4	5
8. 私は友人に嫌なことを頼まれても、断ることができる . . . . .	1	2	3	4	5
9. 私は何でもやればできると思う . . . . .	1	2	3	4	5
10. 私は自分で自分をほめることができる . . . . .	1	2	3	4	5
11. 私は友人と話を合わせるのがうまいと思う . . . . .	1	2	3	4	5
12. 私は話が豊富であると思う . . . . .	1	2	3	4	5
13. 私は今自分に満足している . . . . .	1	2	3	4	5
14. 私は同級生だけでなく、先輩後輩ともうまくやっていくことができる . . . . .	1	2	3	4	5

2. あなたの初対面の人と会話することに対する意欲はどのくらいですか？現在のあなたに当てはまると思うところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

全く話したいと思わない

どちらとも言えない

とても話してみたいと思う

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

4. あなたは初対面の人とどのくらい上手く会話できると思いますか？最大を100%として、現在のあなたは何%くらいか下の記入欄にお答えください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

0% 10% 20% 30% 40% 50% 60% 70% 80% 90% 100%

以上で終了です。ご記入ありがとうございました。

恐れ入りますが、記入漏れがないかもう一度ご確認をお願いします。



## 5. 原因帰属記述用紙

### ①方略帰属群用

1. 今回、相手との会話が盛り上がらなかった原因について、あなたの会話の仕方・話の展開のさせ方・相手に対する接し方などに関するもので考えられることをできるだけ多く、詳細に下の記入欄にお答えください。解答は横書きで100字以上お書きください。

									100					

②外的要因帰属群

1. 今回、相手との話が盛り上がらなかった原因について、あなたの行動に関するもの以外で考えられることをできるだけ多く、詳細に下の記入欄にお答えください。

解答は横書きで100字以上お書きください。

										100				

6. 次の方略記述用紙

①方略帰属群・外的要因帰属群用

2. 先ほど考えた相手との会話が盛り上がらなかった原因をふまえて、どうすれば初対面の人との会話を盛り上げられるかについて考えられることをできるだけ多く、詳細に下の記入欄にお答えください。

解答は横書きでできるだけたくさんお書きください。

									100							

※①, ②それぞれ2ページずつあります。ご確認お願いいたします。

○表面の続きがあれば、こちらにお書きください。


②統制群用

1. 次回、初対面の人と話す場合、どのような話をしますか。考えられることをできるだけ多く、詳細に下の記入欄にお答えください。

解答は横書きでできるだけたくさんお書きください。

									100					

○表面の続きがあれば、こちらにお書きください。


## 7. 帰属過程後質問紙

# 大学生の会話についての調査

この調査は、大学生がどのような話題で盛り上がるのかに関して質問させていただくものです。みなさんの回答結果は統計的に処理され、個人が特定されたりすることは絶対にありません。

回答は人によって異なるのが普通ですから、正しい解答や間違った回答というものはありません。深く考えすぎず、ありのままをお答えください。

お手数をおかけしますが、ご協力よろしくお願いします。

記入欄がある箇所については、このアンケート用紙に直接記入してください。

選択肢のある質問については、当てはまる番号を選び○をつけてください。

なお、この調査に関して疑問点や問題点がございましたら、下記までご連絡下さい。

2010年11月

三重大学 教育学部 人間発達科学課程 4年

中西研究室所属 松谷 健二

E-mail: 207721@m.mie-u.ac.jp

性別(男・女) 年齢( )歳

学部( )

学年(1年・2年・3年・4年以上・院生)

※表紙含め4ページあります。ご確認お願いいたします。

1. それぞれの質問について、あなたに当てはまるところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
例) 私の話は相手にとっても面白いと思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
1. 私は話をよく大げさに話してしまう・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
2. 私は会話をするといつも楽しくなる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
3. 私は話が豊富であると思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
4. 私は話をするとすぐにグチを言うってしまう・・・・・・・・	1	2	3	4	5
5. 私は話をしているとき、つい感情的になってしまう・・・・・・・・	1	2	3	4	5
6. 私は人にうまくアドバイスできる・・・・・・・・	1	2	3	4	5
7. 私は同級生だけでなく、 先輩後輩ともうまくやっていくことができる・・・・・・・・	1	2	3	4	5
8. 私は話に興味がないときは態度に出してしまう・・・・・・・・	1	2	3	4	5
9. 私は誰とでも仲良くできると思う・・・・・・・・	1	2	3	4	5
10. 私は自分で自分をほめることができる・・・・・・・・	1	2	3	4	5
11. 私は友人に嫌なことを頼まれても、断ることができる・・・・・・・・	1	2	3	4	5
12. 私は話していると悲しくなってくるときがある・・・・・・・・	1	2	3	4	5
13. 私は今自分に満足している・・・・・・・・	1	2	3	4	5
14. 初めてあう人にでもうまく自己紹介ができる・・・・・・・・	1	2	3	4	5



	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらともいえない	大体あてはまる	非常にあてはまる
15. 私はその時の気分で話し方を変える・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
16. 私は話が盛り上げられないと悔しい・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
17. 私は人にしてほしいことをきちんと説明できる・・・・・・・・	1	2	3	4	5
18. 私はたとえけんかしてもすぐに仲直りできると思う・・・・・・・・	1	2	3	4	5
19. 私は話が途切れると不安になる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
20. 相手とうまく話のやりとりができる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
21. 私は何でもやればできると思う・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
23. 私は他の人に話を遮られるのが嫌いだ・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
23. 私は誰とでも気軽に話せる・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
24. 私は友人と話を合わせるのがうまいと思う・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5
25. 私は話を途中でやめられない・・・・・・・・・・・・・・・・	1	2	3	4	5

2. あなたの初対面の人と会話することに対する意欲はどのくらいですか？現在のあなたに当てはまると思うところの数字に○をつけてください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

全く話したいと思わない

どちらとも言えない

とても話してみたいと思う

0

1

2

3

4

5

6

7

8

9

10

3. あなたは初対面の人とどのくらい上手く会話できると思いますか？最大を100%として、現在のあなたは何%くらいか下の記入欄にお答えください。あまり深く考えないで直感的に判断してください。

0%

10%

20%

30%

40%

50%

60%

70%

80%

90%

100%

以上で終了です。ご記入ありがとうございました。

恐れ入りますが、記入漏れがないかもう一度ご確認をお願いします。